

KULIC

11

1978. 11

慶應義塾大学研究・教育情報センター

KULIC 11

目次

- 1……………新所長の抱負 大学—その顔と表情— 山崎 照雄
2……………数学者と文献 斎藤 利弥
6……………J. ハイドン研究所の情報処理 中野 博詞
10……………ライブラリー・インストラクション
—知識への一つの接近法— 渋川 雅俊

トピックス

- 16……………始まった医学文献オンライン検索サービス

- 19……………医学情報センターと文献探索について 浅井 昌弘

現状分析レポート

- 23……………日吉情報センター（藤山記念日吉図書館）の改装計画 天野 善雄

- 5……………対話ということ<スタッフルーム> 池田 久子
9……………Adam Smith 書簡雑感 小池 基之
18……………奈良絵本について<ティールーム> 松本 隆信
22……………スイスホリディズ<ティールーム> 藤沼 貞弘
29……………外国人利用者と図書館<スタッフルーム> 鈴木 富弥夫

資料

- 30……………三田情報センターの展覧会 石川 博道

- 33……………年次統計要覧<昭和52年度>

- 36……………編集後記 <表紙> 孫福 弘 <カット> 日下部寿子・高野順子・滝口久美子

大学—その顔と表情—

日吉情報センター

山崎 照雄

(法学部教授/ドイツ語、
哲学・倫理学)

諸大学に塾が先駆け、図書館と研究室の資料・文献、書庫の管理・運用の、両者の統合による、運営機能並びにサービスの高次化を目指し、研究・教育情報センターへの改組に先鞭をつけて8年余をへた。たま

たまこの年、在外中で、その経緯、消息に明かでないが、私は当時、アルスター湖畔を見おろす14階建、ハンブルク大学の哲学研究室や石造古色のウィーン大学研究室内の客員教授扱いで書庫利用の便宜を供され、大学図書館では、たたずまいこそささやかながら、ライン河を眼下に、総ガラス張りの閲覧室から往来する船足に耳目を楽ませたボンや、地中海の空と水の碧をひと色に溶け合わず眺めを恣にしたバイルートのアメリカ大学図書館へ、昼食抜きでせせと半月通っていた。どこでもライブラリアンに特有のあの親身な好意を共通にしているunforgettableであった。声高な大学解体の叫びに、向うも旧体制の改革と模索は熾んであったが、有機的に開かれた情報センター化の例を見聞しないままに戻った。

その有りようは多様ながら、新旧をおしなべて、大学内の図書館、研究室の施設や外観に、当の大学の「顔」が如実に覗かれる思いであった。そこに漂い、立ちこめる活気と蔵書類、それに専門職員の謙虚と矜持をなまざたサービスを加えれば、また自ずと、その大学独自の「表情」がにじみ出て、ゆくりなくも行きずりの利用者にさえ、品格というか、大学それ相応の「格」と覚しい、イメージを暗々裡に告げているかに見うけられた。

由来、漱石の三四郎ならずとも「これから先は、図書館でなくちゃあ、物足りぬ」一面は、近頃の情報メディアの変貌ぶりにつれての機能と形態の転換にもかかわら

ず渝らぬ訳で、学生サイドでの学的研鑽、真理への飢えや渇きに応える使命とその役割とは、今日も果たしつづけているといえましょう。

が、発足以来お骨折りの三沢所長のあと、高鳥所長や日吉主任の方々から、最後の奉公と心がけ、あい勤めよとはげまされ、はからずもお引き継ぎする仕儀となった。ただ、生来の、昼行燈 *lumen obscurum* に加えて、新参、教育実習中の身で、抱負などとはおこがましく、このような私事、愚見を以ってご挨拶に替えさせて頂く次第です。

幸い当センターのベテラン方のチーム・ワークに支えられ、目下、現状の再検討と問題点の総洗い作業中で、近く高鳥所長にご提出のうえ、お赦し頂ければこれを塾長、所轄担当理事或いは日吉主任会議、委員長各位のご高覧に供し、深切なご理解と強力な格別のご援助を賜りたいと存念しています。

すでにご案内の通り、この辺の消息も、先刻、大学報(第82号)で、明敏な高鳥所長の「動き始めた新図書館構想」中の「日吉図書館の現状と将来」における的確、正鵠な指摘により、窮状の核心は美事に刷決ずみで、皆様のご記憶に新たでありましょう。私共も驥尾に付し「研究者と学生とが共に便宜を受ける図書館建設を、計画すべき時期」の実現を熱望し、微衷を吐露いたせば、これを5年後に迫る、日吉創設50周年、記念行事の一環として、三田の新図書館と相並んで、名実共に「天下の慶應」の〈顔〉にふさわしい日吉図書館・研究棟、建設の日を切念して熾まぬ者です。

見果てぬ夢に、現実を省りみぬは狂気、現実のみを重んじて夢ひとつ画かぬも狂気。さりとして現状になずむ余り、程々に折り合いをつけ戦わずに生きるは、狂気の極み…とか。ラ・マンチュアの男の夢にも似る希望の虹を、120年の歴史を踏まえ、続々とこの丘に登り集う、全学部に跨る若い後輩らの、紺碧の明日の空への飛翔に架けて、お力添え願えるか否か。ひとえに塾の進路策定の衝にお当りの舵手の方々の深厚な認識、ご英断と、OB諸賢の義塾に寄せられるパッション(ご情熱)との総結集の成否いかんにかかると存じ、茲に塾の前途に榮光あらんことを希って撰筆いたします。

注) 筆者は任期満了に伴って退任した三沢進君の後を承けて昭和53年4月1日から日吉情報センター所長に就任した。

数 学 者 と 文 献

齋 藤 利 弥

(工学部教授/数理工学)



数学者のライブラリーの利用のしかたについて書いてほしいということ

であるが、数学者だからといって、他の専門の方々とそう変わったことはなさそうである。ただ、文献とのつき合い方には、いくらか特徴があるかもしれない。学問の性格というのは案外そんな所ににじみ出してくるものである。そこで、そういう事を中心に何か書いてみようと思うのだが、これも実は自分自身のことしかわからない。

私はどちらかといえば無精者のほうで、文献も必要最少限しか読まない。だから勤勉な数学者は私とはちがった方法で文献に接しているのかもしれない。しかし見わたした所、私程度に無精な数学者もかなり多勢いるように思われるので、これから書くことも、まんざら一般性がないわけではないと思う。

さて、この頃はむやみにたくさん論文が出版される。これは私のような無精者にとっては、はなはだ困ることである。新着の雑誌の中から自分に役立ちそうな論文を拾い出すことが、最近は結構大へんな仕事になってしまった。

論文というのは、要するに印刷された数ページの文書にすぎないので、それ自体は情報でもなんでもない。それを読むことによってはじめて情報化されるわけである。ところが数学の場合、論文を「読む」というのは「はじめから終わりまで、推論を細かくチェックし、計算をいちいちやり直しながら読む」ということであって、こういう手間のかかる読み方をしない限り、論文は情報に転化しないのである。

これは数学という学問の性格によるのだろうと思うのだが、論文に書かれていることは「本当」か「うそ」かのどちらかであり、そのどちらであるかは論文を読めばわかってしまうものなのである。だから相反する二つの学説が長い間対立するということは数学では決しておこらないし、また実験科学の場合のように追試によって誤りが発見され、「本当」だと思っていたことが「うそ」になるということもない。読めばその時点ですべてが明々白白となるべきものであり、そして明々白白にならない限りは情報としては役に立たない。だから論文に述べられている結果を利用したければ、すべてが明々白白になるような読み方で論文を読まなければならないということになる。

こういう手間のかかる読み方をするものだから、そうそうたくさん論文を手当たり次第に読むわけにはいかないで、かなり神経を使って読むべき論文を精選しなくてはならない。ことに私のような無精者は、自分に直接役に立ちそうもない論文は、できるだけ読まずにすませたいのだから、ますます事は面倒になる。

十数年ほど前、アメリカ数学会が、専門の分野を指定して、しかるべき料金を払うと新しく出たその方面の論文のコピーをそろえて送ってくれるというサービスをはじめたことがあったのだが、私の場合、こういうサービスはあまり役に立たない。たとえば私は最近力学系とよばれる分野で仕事をしているのだが、力学系ということばがタイトルにはいっている論文でも全然興味をひかれないうものもいくらかもあるし、逆に純粋なトポロジー

の分野に属する論文でも大へん役に立ちそうなものもある。つまり何が私にとって役に立つかということは、専門分野の名前では決められないので、したがってこういう手っ取り早い方法は通用しない。これは必ずしも私に限ったことではないらしく、このサービスは利用者が少くて中止になってしまった。

さてそれではどうするかというと——コンピューターを使った大がかりな情報検索が進んでいる今の世の中に、まことに間が抜けた話なのだが——折にふれては図書室に顔を出して、新着の雑誌をいちいち自分の手でめくるといふ、いちばん原始的な方法がいちばんよい。もっとも、数論の専門誌である *Acta Arithmetica* とか、確率統計の専門誌である *Annals of Mathematical Statistics* のように、はじめから私の役に立たないことが明かな雑誌には手をふれないが、何かひっかかりのありそうなものは、なるべくながめてみることにする。そしてちょっと気になるタイトルの論文とか、今までにたびたびその仕事を利用させてもらった著者の論文とかが目についたら、その内容をざっとみわたし、主要な結果をひろい読みしたりして、その論文を読むべきかどうかを決定する。これが私に限らず、多くの数学者が採用している論文選択法である。年期のはいった数学者なら、この方法で多くの文献の中から読む価値のあるものを嗅ぎ分ける鼻をもっている——と少なくとも自分だけはそう思っている。

これは手間暇のかかる仕事だけれど、決してつまらない仕事ではない。むしろ数学者達はこの仕事を楽んでいるように見える。ただしこれを本当に楽しくやろうと思ったら、大図書館の閲覧室のような静粛で緊張した雰囲気漂っている所で、端然と机に向って座ったのではだめなので、椅子に行儀悪くふんぞりかえってお茶でものみながら、あるいは友人と一しょにページをめくって論文をほめたりけなししたりしながら、要するにくつろいだ環境でやるのがよい。本当は新着雑誌を一抱え家にもって帰って、深夜書齋にとちこもり、ウィスキーでもちびちびやりながらページをめくるのがいちばん楽しいのだけれど、これは実

現不可能だからあきらめることにする。

数学者にはどうもこういうだらしないやり方が性に合うらしく、だから彼等とはかく中央図書館を敬遠して、自分達の研究室の近くに、自分達専用のライブラリーをもちたがる。これは工学部情報センターの方針である *centralization* とは全く相反する精神で誠に申し訳ないのだが、そして *centralization* というのは学部全体としてみれば確かに効率のよいやり方なのだろうとは思っているのだが、何分にも効率という考え方があまりびんごない連中が多いのだから仕様がでない。

そこでわれわれの数理工学科でも、現在の建物に移った時、図書室をつくることにした。毎年かなりの研究費をつぎこんで図書を買込み、さらに昨年からは日本数学会から、学会誌と交換で送られてくる内外の雑誌の保管を委託されたので、かなりの点数の専門雑誌をそなえることができ、スタッフの諸氏に数学者流の情報検索を楽しんで頂いている。これはいわば情報センターの原則である *centralization* に対する造反行為に近いが、それにも拘らず、情報センターがライブラリアンを向出させて全面的に援助して下さっているのは本当に有り難いことで、ここで心から御礼を申し上げておく。

何だか話があらぬ方角にそれははじめたようであるが、とにかくこんな具合にして読むべき論文をさがし出す。今度はいよいよそれを読む段取りになるわけだが、それがすでに申し上げたように大へん手間のかかる仕事なので、まずコピーをとる。私がまだ若かった頃はコピーをとるということはすなわちタイプライターを叩くことであつた。電動タイプライターなどはなかったから、文字通り叩くという感じである。おまけに叩き終わった後で数式の書き込みをしなければならぬ。これはかなり面倒な作業であつた。それに比べるとこの頃は、複写機に雑誌をのせてボタンを押せばよいのだから楽なものである。あまり楽なものだからむやみにコピーをとって、そのまま本棚につこんでおくということもしばしばあるのだが、もちろんそんなことはしないほうがよい。コピーをもって研究室なり自宅の書齋なりにたてこも

り、計算用紙と鉛筆と灰皿とをかたわらにおいて読みはじめるべきである。かくしてそれから数日間——場合によっては数週間が一つの論文を読むために費される次第となる。

こういうしつこい読み方は、何も論文に限らず、単行書についても同じである。もちろん、何か特定の事項をしらべるために、書物の一部分をひろい読みすることもしばしばあるけれども、単行書とのつき合いはそれだけにとどまらない。数学者という職業をつづけようと思ったら、いくつになっても学生時代と同じように、むきになって書物ととりくまなければならないのである。

なぜかといえば、数学ではつねに新しい結果が組織化され、新しい理論体系が組み上げられていく。そしてその新しい理論体系がいろいろな分野に有力な道具として浸透していくので、今までになかった新しい数学的言語をたえず習得していないと研究の第一線にとどまっていることが難しい。

たとえば、私の専門に近い所でいえば、私の若かった頃、多様体上の微分方程式を研究するためには、微分方程式そのものの知識の他には1930年代頃までのトポロジーの理論を知っていれば一応間に合ったものである。ところが近年微分トポロジーとよばれる理論が急速に発達し、これが多様体上の微分方程式の研究にきわめて有力な武器であることがわかってきた。その結果微分トポロジーの専門家達がこの新しい武器を掲げて我々の縄張りにのりこんでくる。こうなるとこちらものんびりしてはいられない。そこでいい年をして微分トポロジーの書物ととりくまねばならなくなる。今まで全く知らなかった理論を勉強して、それを自分の研究に使いこなそうというのだから、学生時代に帰ったつもりで、ねばり強く書物ととりくむ必要がある。このねばりがなくなった時、数学者は現役から脱落するのである。

こういう目的で一冊の書物を読み上げるには、当然かなりの時間を要する。だからライブラリーの利用者側からみれば、図書の貸し出し期間をできるだけ長くしてほしい。しかしライブラリーの立場からみれば、一冊の本をいつまでも独占され

ることはその公共性に反する。現在われわれの図書室は単行書の貸し出し期間を一応三ヶ月と定めているのだが、これは図書室の管理という点からみれば長すぎるし、借りる側からみれば短かすぎる。いちばんよいのは利用度の高そうな書物をすべて三、四部まとめて買い込むことなのだろうか、そんなことをしたら研究費はたちまち底をついてしまう。

要するに数学者の文献利用法はどうみてもあまりスマートではない。多くの論文や書物にスピーディーに目を通して、要領よくメモをつくっていくというような颯爽たる情報収集の仕方は数学者にはあまり縁がない。われわれと文献とのつき合いはいつもしつこく、そして少しばかり重苦しい。

ところで、こんな濃密なつき合いをしてやっと得られたものを、たんに「情報」とよんでよいのだろうか。この文章でもたびたび情報ということばを使ってはきたものの、私自身は近頃はやりのこの便利なことばがあまり好きではない。自分の研究に一転機をもたらしてくれたような貴重な先人の労作までも、情報ということばの中に一括してしまうのは、何か粗野な行為のような気がしてならない。そんなわけで、この大学に来てまだ日の浅い私は、図書館を情報センターとよぶことにいまだになじめないのである。

理工学情セメモ

◇学生用基本図書の充実

過去数年間、図書予算は研究者用の雑誌の購入を重点に使用されてきたため、学生用図書の整備がかなり遅れているのが実状であった。昭和52年度からは、この点を改善すべく必要な予算申請を行い、学生用基本図書の充実に向けて第一歩を踏み出した。

◇雑誌所蔵目録 '77年版の刊行

'71年版の刊行以来すでに7年が経過し、この間、JICST 資料の増加、バックナンバーの追加、新規雑誌の購入等により蔵書内容がかなり変化したので、利用者の便宜を図るため '77年版の雑誌所蔵目録を刊行した。

対話ということ

池田久子

ここは矢上のテニスコート。教職員も学生も、一日の疲れを忘れて、白球を打ち合う熱気のこもった姿がさわやかだ。工学部として矢上台に移転して七年。丘の片隅のテニスコートからは、体育館、生協、食堂、部室、情報センター、教室、研究・実験棟と充実したキャンパスが見渡せる。一つ谷を越えれば、日吉キャンパスの緑が美しい。背後に広がる川崎工業地帯の灰色がかつた空気とは無縁のように、矢上台の上には、青い大きな空が遮るものなく見上げられる。ポーン、ポーンと快く響く音を耳にしなから、私はやっと、この丘の住人らしい気分になることができた。

速いもので理工学情報センターに来て丸三年が過ぎた。その間、図書の貸出・複写サービス・レファレンスサービス・文献取寄せというカウンター業務を担当してきた。中でもレファレンスサービスは、経験の浅い私にとってはかなり神経を使う仕事であった。

そんなある日、一人の外来者が難問を抱えて来られた。「国会図書館・日本科学技術情報センター・東大と、どこで調べても手に入らない文献だが、こちらには無いであろうか。」という質問である。名だたる図書館にないのでは、こちらとしても歩が悪いと思いつつ調べることにした。示されたメモから、アメリカの大学刊行の雑誌論文とわかり、幸い著者、論題、巻号年、頁数と文献を探す上で不足なものはない。早速、手元の主だった雑誌目録に当たってみたが、該当する誌名はない。そこで *Ulrich's* や *World list* 等の書誌で調べたが、やはりここにも誌名はない。つまり、

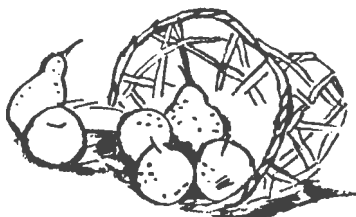
最も高い信頼を寄せてきた雑誌名に誤りがあったわけである。次に、著者を手掛りに文献調査、1950年代後半に発表された水質汚濁関係の論文であるから、*Chemical Abstracts* の5年間分の累積著者索引で調べると、同著者の論文が数件浮かんできた。メモの論題を頼りにこれと覚しき抄録に当たると、意外に早く目指す論文に到達できた。新たに訂正された誌名から当館の雑誌目録を調べ直すと、当初の予想とは逆に、その所蔵が確認できた。1968年以前の雑誌がある2階書庫へ、足取り軽く駆け上がれば、少々黄ばんだページに探し求めた論文は見出されたのであった。

その外来者は、「国会図書館にも東大にもなかった文献が、こちらにはありましたね。」と実に素朴に言われた。しかし、問題は別のことである。新誌名から調べれば、前二館にもこの雑誌があることはすぐに判るのだから。では、なぜ、もっと早くその誌名自体の

誤りに気付かれなかったのだろうか。雑誌の多くは、その刊行中誌名変更を余儀なくされるし、この件のように書誌事項に間違いがあることも稀ではない。一番の基礎でつまずけば、どのように労力をかけようとも、良い成果は期待できない。

レファレンスサービスの第一歩は、対話から始まると思う。その時点で質問者が持っている情報をすべて出してもらい、何が求められているのかを受け手が確実に理解すること。この対話が十分に行なわれないと、労多くして報われず、一つの文献との出会いを拒んでしまう結果となる。日々に進歩する科学技術と、その生み出す情報洪水の狭間にあっても、カウンターにおけるレファレンスサービスはより良き対話を基に繰り上げられるものと確信している。

(理工学情報センター)



J. ハイドン研究所の情報処理

中野博詞

(文学部教授/西洋音楽史)



第2次世界大戦の終結を境に、西洋音楽史の研究方法は大きく変化した。

ひとりの学者が史料研究から様式研究まで、総合的にあつかってきた従来の研究態度は、あらゆる意味で不十分であった。厳密であるべき史料研究が、様式研究との安易の混合によってあいまいとなり、不確実な史料研究の上に立っての様式論は、砂上の楼閣と化した。作品の成立年代ひとつを取り上げてみても、第2次大戦前の論文には、なんと誤りが多いことだろう。こうした研究の行き詰まりに気づいていた学者は、もちろん少なくない。大戦の戦禍をぬって、ヨーロッパ各地の図書館や修道院に史料調査の旅に出かけた音楽学者が、何人かはいる。しかし、ひとりの学者が活躍できる範囲はかぎられており、学者間の情報交換はほとんど行なわれてはいなかった。

* * *

1945年の平和の到来は、音楽史研究に新たな時代をもたらした。様式研究はさておき、もう一度、史料を徹底的に調査し、主要な作曲家の学問的全集を刊行することが、第一の課題となった。それも、個人によるのではなく、世界中の音楽学者たちの協力によってである。その結果、各作曲家の研究所の復活と新設となった。古典派時代にかんしてだけでも、ボンのベートーヴェン・ハウス、ザルツブルクのモーツァルテウム、そしてケルンのハイドン研究所がある。各研究所の目的は、新全集の出版と研究誌の刊行である。研究所の充実は、史料研究にかんしては研究所、研究所の成果にもとづく様式研究は総合大学の音楽学部

で、という分業を可能にし、両者が一体となって音楽史を研究する現在の研究態勢が確立されたのである。

大戦の傷跡がようやく癒えた1955年、今は亡きドイツ音楽学界の重鎮フリードリヒ・ブルーメを所長に、ハイドンの史料研究の先駆者ペーター・ラールセンを学術主任として、ヨーゼフ・ハイドン研究所がケルンに開設された。資金は国家からの融資のほか、楽譜出版社であるとともに、ルール工業地帯の王でもあるヘンレが多額の資金を投じ、フォルクスワーゲンをはじめとする西ドイツ産業界が協力する、という恵まれたものであった。

全集の出版は、研究所開設の3年後からすでに始まっているが、研究所の最初の10年間の活動は、ハイドンの作品にかんするあらゆる楽譜の収集と調査に主力がそそがれた。研究所の定員は、現在においても6人にすぎないが、所長はあくまでも名誉職で、実際に活動する学者は5人である。その内、1人は完全なライブラリアンであり、のこりの4人が学者として史料の調査に専念している。ラールセンが最初に着手した仕事は、世界中に散在するハイドンの楽譜のリストを作製することであった。ラールセンが第2次大戦中にあつめた情報をもとに、世界中の図書館、修道院、個人のコレクションに問い合わせの手紙を出し、それぞれの所蔵状況を把握したのである。その情報をライブラリアンが整理したのが、「史料カード」と呼ばれる研究所の最初の成果である。18世紀後半のあらゆる音楽を作曲したハイドンの作品は、32種類の楽種にわけられ、交響曲だけで

も107曲におよぶのだから、作品類は莫大な数にのぼる。しかし、研究所の「史料カード」は、全作品にそれぞれ数枚ずつのカードがあたえられている。まず、1757年にA. ヴェン・ホーボーケンによって出版された「ハイドン・カタログ」の番号が記入され、作品のオリジナルのタイトルがあげられており、作曲年代が確実な史料から明らかなものは、作曲年代も記入される。そのあとは、各作品の現存するあらゆる楽譜の所在地、図書館あるいは修道院の楽譜番号、楽器編成が記入され、重要な楽譜には、その信憑性にしたがって、ハイドンの自筆楽譜には二重丸、ハイドンと直接関係のあった写譜家の筆写楽譜には一重丸、初版楽譜には三角がふされている。ともかく、この「史料カード」を見れば、各作品の現存する楽譜の分布状況は一目瞭然となる。

ラールセンが行なった第二の仕事は、「史料カード」の作製によって明らかになった、ハイドンの楽譜を多く所蔵する図書館や修道院に、研究所の学者を派遣して、楽譜を実地調査させたことである。実地調査は、マイクロフィルムによる楽譜収集をまかねているのだから、もっとも重要な点は、信憑性の高い楽譜と低い楽譜の区分であり、マイクロフィルムからは知ることが出来ない部分の調査が問題点となる。ハイドンの楽譜は、自筆楽譜、筆写楽譜、印刷楽譜に大別されるが、調査方法も楽譜によって異なる。自筆楽譜と筆写楽譜では、まず用紙が調査されなければならない。第一に紙のすかし、つづいて5線が何段あるか、そして紙の型と寸法である。同時にインクの色も、年代によって変わるから見落せない。とくに、マイクロフィルムにとらない信憑性の低い楽譜では、写譜家の書体、ハイドンの記譜法との相異点、紙のすかし、楽器編成などから、信憑性の低いことを証明するとともに、その筆写楽譜が作製された年代をも推定しなければならない。一方、印刷楽譜においては、版の番号がもっとも重要であり、表紙のタイトルから信憑性を見当をつけることもできる。こうした実地調査によって生みだされたのが、「史料調査記録」であり、図書館あるいは修道院ごとにそれぞれまとめられている

「史料調査記録」の巻数とページ数は、「史料カード」に記入されているのである。こうした実地調査によって、楽譜を写したマイクロフィルムの数は、研究所開設10年をへた1965年の時点で、じつに225,000巻におよんでいる。もちろん、世界中の図書館、修道院、個人所蔵を、研究所の学者がすべて調査したわけではなく、楽譜の少ない所蔵地にかんしては、研究所が調査方法を明細に記した依頼状を出し、マイクロフィルムと調査結果を送り返してもらっている。いずれにしても、ラールセンが行なった二大事業で、ハイドン研究所の基礎はできあがったのである。

* * *

ラールセン学術主任の時代が、史料収集の段階であるとするならば、1960年にラールセンの後任となり、現在も学術主任をつとめているゲオルク・フェーダーの功績は、収集された史料をいかに有効に利用するか、同時に全集出版に能率よく活用するかを、研究させたことであろう。また、フェーダー自身の史料研究の成果も、きわめて大きい。フェーダーが最初に手がけたのは、ハイドンの自筆楽譜の徹底した研究である。ハイドンの場合、自筆楽譜が保存されている作品は少なく、107曲の交響曲にかんしても、自筆楽譜が保存されている作品は半数にもみたない。それだけに、自筆楽譜が保存されていない作品の成立年代の推定は、従来一般に様式研究からなされてきた。しかし、フェーダーはハイドンの記譜法の変遷に着目したのである。研究所の学者達の協力のもとに、フェーダーが発表したのは、倚音の記譜とメヌエットのつづりに変化が見られる事実である。すなわち、ハイドンは1762年以前の自筆楽譜においては、主音の時価に関係なく倚音はすべて8分音符で記譜している。しかし、1762年以降の自筆楽譜においては、16分音符と32分音符の主音にたいする16分音符の倚音をのぞいて、一般に主音の半時価の倚音を用いているのである。一方、メヌエットのつづりにかんしては、1760年以前の自筆楽譜においてハイドンは *Minuet*, *Minuetto*, *Minuetti* の3種の表示を用い、1760年以降においては *Minuetta* の唯一の例外をのぞいて、*Menuet* のつづりを用

いているのである。1765年以前の初期の作品には、自筆楽譜が保存されていないものが多いだけに、このフェーダーの発見は、ハイドンの記譜法に忠実に従った筆写楽譜の保存されている作品では、成立年代推定の強力な論拠となった。

ハイドンの自筆楽譜の研究は、たんに年代推定に役立つばかりではない。曲がフォルテで開始する場合には、一般に曲頭の強弱記号を省略するハイドンの習慣。ハイドンは生涯を通じてスフォルツァンドを用いなかった事実。スタッカートは一般に点ではなく、垂線で表示しているなど、ハイドンの記譜法上の特質は、筆写楽譜と印刷楽譜の信憑度を決定する重要な手がかりとなったのである。

ハイドンの自筆楽譜、および写譜家による筆写楽譜に用いられている用紙のすかしを、年代別および産地別に分類した「すかしカード」を作製させたことも、フェーダーの大きな業績である。ハイドンならびにエステルハージ侯爵家に仕えていた写譜家が使った用紙は、鹿のすかしをもつエステルハージ家ですかれた紙をはじめ、イタリア産、フランス産、イギリス産など10数種にのぼるが、同じすかしでも年代によってすかしの形が変化している。一般にハイドンは、自筆楽譜に作曲した年を記入しているので、自筆楽譜のすかしから、用紙の作製年代が推定されるのである。研究所の「すかしカード」は、ウィーンの職業的写譜家が用いた用紙にまでおよんでいるので、研究所の「すかしカード」にない用紙による筆写楽譜は、地方産の信憑性の低いものと判断されることになる。同時に、信憑性の高い筆写楽譜が保存されている作品にかんしては、「すかしカード」を用いることによって、筆写楽譜だけからでも、およその作曲年代を推定しえるのである。

「すかしカード」とともに、筆写楽譜にかんしては、「写譜家カード」が作製されたことも、研究をいちじるしく迅速化させた。筆写楽譜では、ハイドン自身が校正の手を加えたもの、あるいはハイドン自身が署名をしているものが、もっとも高い信憑性をもつ。つづいて、ハイドンの周辺で活躍した写譜家による筆写楽譜。第3は、上述の

ハイドンの記譜法の特質を忠実に守っている筆写楽譜。それ以外は地方産で、信憑性が低い筆写楽譜と判断される。写譜家の筆跡の特質は、音部記号、タイトルおよび速度標語、数字、そして符尾に見出だされる。そこで、研究所では信憑性の高い筆写楽譜の写譜家たちの筆跡の特質を写し、各写譜家のカードを作製し、それぞれの写譜家に研究所固有の番号をふしたのである。この「写譜家カード」を持って実地調査に出かければ、筆写楽譜の信憑性は一目瞭然となるのである。

印刷楽譜の「版番号カード」の完成は、複雑な印刷楽譜の流通経路を解明する結果となった。版権が確立していなかった18世紀後半においては、海賊版が横行し、同じ銅版がタイトルだけをかえて数社によって用いられる場合も少なくなかった。したがって、出版社が異なっても、版番号が同じならば、同一の銅版を用いたものであり、実質的には少しも変わるところがないのである。研究所では、各曲ごとに出版社と版番号を記した「版番号カード」を作製し、印刷楽譜の変遷過程を簡略させたのである。

* * *

ハイドン研究所では、以上のような情報処理を行なったのち、それぞれの曲に必要なすべての情報を各曲ごとにファイルしているのである。そして、われわれ日本人をもふくめた世界中に散在するハイドン全集の校訂者に、情報ファイルと楽譜のマイクロフィルム、そして校訂方法の明細を送って、ちやくちやくと全集出版を進めているのである。当初35年計画で出発した初の学問的ハイドン全集も、今や軌道にのって半数以上が出版され、少なくとも1990年代には完結する見通しが立ってきた。こうした背後には、研究所のあざやかな情報処理が大きく貢献しているのである。「新ハイドン全集」はたんに楽譜の出版だけが目的ではなく、各作品にかんするあらゆる分野にわたる研究の完成が、最大目標なのである。「新ハイドン全集」の完成をまわって、われわれは初めてハイドンを正しく論じることができるのである。

Adam Smith 書簡雑感

小池基之

慶應義塾図書館はいくつかの塾宝ともいふべきものを所蔵している。2通の Adam Smith の自筆書簡も当然そのうちに数えあげていいであろう。その入手の経緯については、すでに昭和45年2月10日付の「日本経済新聞」に書いたことがあるので、ここには繰返さないが、塾所蔵の2通の Smith の書簡は、すくなくとも二つの点において、注目すべきであるといっている。

その一は、塾所蔵の2通の書簡、すなわち1769年1月15日と3月12日の日付をもつ、Sir David Dalrymple, Lord Hails 宛の書簡は、その一部を除いて、未発表のものであったという点である。John Rae の“Life of Adam Smith,” 1895は Smith 伝としては古典に属するが、そこで Rae は1769年3月5日付の Lord Hails 宛書簡を引用したあと、「1週間後に Smith は Lord Hails 宛にも一つの手紙を書いた」がそれは「どうやら紛失したらしい」といって、そのなかの Douglas 事件に関する文章だけを引用している。Rae はこの箇所を Brougham の“Men of Letters”によって書いているのである。塾所蔵の3月12日付書簡は正しくその「紛失した」とされるころのものであって、この点では Rae の記述は書き改めらるべきある。(この2通の書簡はその全文に簡単な解説を付して昭和45年5月「三田学会雑誌」上に発表した。Rae の Smith 伝は大内兵衛・節子両氏によって昭和47年10月邦訳されたが、上記の件については何等の註記もされていない。)

その二は、これらの書簡は Smith が Kirkcaldy で「国富論」執筆に精魂を傾けている

丁度その時期のものであり、「国富論」成立史に一資料を提供するものであるという点である。1月15日付の書簡に「私の研究計画は私にほんの僅かの余暇も残してはくれません。その進み方は Penelope の織物のようで、それがいつ終るとも殆んど見込みもつかない有様です」と書いているのを読む時、私には「国富論」の完成に必死に取組む Smith の姿を眼のあたり見る思いがするのである。

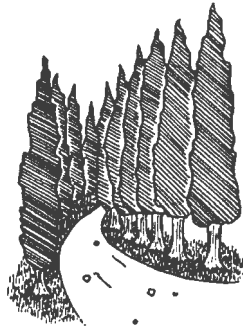
一方、「国富論」刊行200年に当たる1976年以来、所謂 Glasgow 版 Adam Smith 全集(全6巻)の刊行が進められており、その第6巻として“The Correspondence of Adam Smith”が1977年に出版された。そこには勿論塾所蔵の前記2通の書簡も収められている

(No. 115・pp. 139-149, No. 118・pp. 151-152)。

ところが、日本に現在する他の2通の自筆書簡とともに、これらはいずれも東京大学図書館の蔵する所とされているのである。しかし、塾所蔵の前記2通のほかの、1通は京都外国語大学、他の1通は現在竹内謙二氏の蔵する所であって、東京大学図書館には1通も所蔵さ

れてはいない。右の4通の書簡は1968年5月21日 Sotheby のカタログに見えているもので、Y書店を通じて日本にもたらされたのであるが、「書簡集」の編者は、そのカタログとY書店によって作成された複製だけに頼って、慶應義塾図書館による資料提供等は無視したまま、一途に東京大学所蔵と合点してしまったのであろう。加えて、収録書簡を塾所蔵の原文と照合するに、脱漏した語などもあって、編集の杜撰の誇りは免れない。慶應義塾図書館からの申入れに対して、「書簡集」の編者 Ian Ross 氏からは、目下執筆中の Smith 伝のなかで、また「書簡集」改版に際して、訂正する旨の回答を得ているが、これらはまだ出ていない。

(名誉教授)

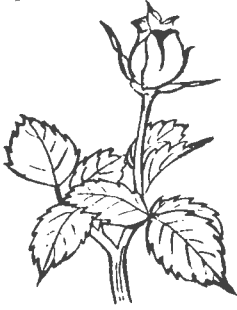


ライブラリー・インストラクション

—知識への一つの接近法—

渋谷 雅 俊

(三田情報センター整理課長)



◇学習資料への手掛り

Journal of Academic Librarianship 1978年5月号のカバー・グラフは、一

人の女子学生が目録コーナーの一隅に置かれている館内テレビジョン・セットでカセット・テープに録画、録音された<カード目録による学習資料検索法>に見入っている写真である。写真には次のような説明が付されている。

目録コーナーの特製キャレルに置かれた19吋のテレビジョン・モニターには、図書館カード目録利用に関する基礎的な案内が映し出される。個人専用にセットされており、受信機を取ると9分間のプログラムが画面に現われ、受信機を通じて目録利用法の説明が流れる。プログラムの途中であっても受信機を置けば10秒以内に次の使用者のためにセットされる。このプログラムは、新入生や教師・大学院生を含めて初めての利用者に非常に良く使われている。¹⁾

辞書や事典などは、言葉や語句、事柄や人物や地名について知るための最も初歩的な、そして最も基本的な道具である。図書館の蔵書目録も、その形が冊子体であろうと、カード目録であろうと、あるいは、最近出はじめた電算機の端末装置であろうと、<資料>について知るための最も初歩的な道具であり、また最も基本的な道具である。

英和辞典、*Encyclopaedia Britannica* などの使い方は、それらが編纂、刊行された目的や範囲や構成などに基づいて一定のルールがある。それは特に資料本体の構成法と密接に関連している。その構成法は誰れでもが使い易く極めて単純にすることを目標としており、いずれの参考図書も、

基本的にはアルファベットなどの字順や五十音の音順や誰れもが理解できる主題分類による単純なやり方で語や事項や人名などが排列されている。

図書館目録は語学辞典や百科事典ほど日常生活に密着したものではないように思われる。したがって、その使い方について述べるまえに目録とは何かここで簡単に説明する必要があるだろう。

図書館目録は次の三つの目的、あるいは、働きをするものであるとされている。²⁾

- ①私たちが著者か、書名か、あるいは、本の内容を知っていれば、図書館にその本が所蔵されているかどうか判る。
- ②目録の中で、特定の著者名のところや特定の主題のところを見れば、その著者のどの著作が図書館に所蔵されているかが判り、また、特定の主題について、どんな文献が収集されているか知ることができる。
- ③ある本の書誌学的な意味での<版>や内容の取扱いの程度などについての選択を助ける。

図書館目録はこうした目的を考慮した上で、辞書や事典と同様に誰れでも簡単に使えるように極めて単純に読みたい本を探し出すことができるよう作られている。

目録を作る、あるいは目録を編成する仕事のことを図書館では資料整理といい、図書館のトータルなサービスに欠かせない大事な仕事の一つとされている。整理という仕事は、一般には、図書を分類したり、カードを書いたりすることと理解されているが、これらは仕事の一部である。この仕事は、一言で言えば、図書館の建物の中に一つの<ビブリオグラフィック・ユニヴァース>を組織することであると言えるだろう。

ビブリオグラフィック・ユニヴァースとは大袈裟な表現であるが、それはともかくとして、図書館の中に資料群を組織するという事は、収集される多くの資料のどれかが、何時かは、あるいは、何時でも誰れかに使われる、そのことを前提にして書庫に仕舞って置くために纏めることである。纏めると言う仕事の中には、資料そのものを書庫の中に、そこから書架上に配架する順序を決めることと、書架に並べられた資料群の中から特定の一冊を探すための手立てを作っておくことが含まれる。

普通、家庭の中での極小のビブリオグラフィック・ユニヴァースは本棚や書斎に何らかの方法で纏められ、並べられている。その並べ方が本を探す手掛りとなる。しかし、図書館のように何万冊、何十万冊、何百万冊、ときには一千万冊を越える程の厩大な蔵書を持つようになり、しかも多数の個人に使われるようになると、家庭におけるような本の並べ方では特定の1冊の本を探す手掛りとはならない。そこで図書館では、収集された1冊1冊の資料の代替品を作り、その代替品と書架上並べられた資料とを連結することによって、何十万、何百万冊もの資料が含まれているビブリオグラフィック・ユニヴァースの中から1冊を探し出すための装置を作っている。この装置が図書館目録である。資料の代替品は、今日では、カードが使われ、それに1冊1冊の資料の様態を記述したものである。代替品であるカード目録と資料は請求記号（コール・ナンバーとも呼ばれる）によって連結されている。

図書館目録の作り方（目録法）は紀元前250年頃から考えだされており、それ以来今日まで多くの図書館専門職が資料を纏め易い方法、資料を探し易い方法を工夫し続けてきている。今後もその努力は続けられていくだろうが纏め易く使い易い理想の目録法はまだ完成されていない。最近では電算機を目録法に導入する新しい工夫がなされている。それはテクノロジー的に工夫を凝らすことが狙いではなく、たとえば、テレビのチャンネルを廻せば見たい番組が画面に現われてくるといった簡便さを目録利用にも実現しようとしているから

である。しかし、目録法が技術的に未完成であるために、装置の単純さを追求することが逆に複雑さを増していると言う皮肉な結果となって表われている。目録を作っている人たちには辛いことだが、目録はそれを作った人にしか利用できないという悪口さえ言われることもある。

図書館目録を使って勉強や研究資料を探すことは大変煩雑な作業になってきている。しかし、使い難い装置であるとしても私たちは今それだけのものしか持っていないのだし、またそれが人類の知識を蓄積しているビブリオグラフィック・ユニヴァースの入口の一つだとすれば、それを使いこなす術を身に付けなければならない。

◇図書館利用教育の必要性

上述のような事情があるにしても、本文では、〈図書館目録利用法〉だけを問題にしているわけではない。ここではこの問題を含め、図書館サービス全体の利用法教育の必要性を検討してみたい。

日常生活におけるクオリティ・ライフのための情報利用法、情報検索法を説く著書が数多く刊行されており、よく売れていると伝聞する。図書館利用法の必要性は、これらの本がよく読まれているのと同じような背景を持っていると言えるが、それは、単なる〈ハウトゥ〉ではない。もっとアカデミックに検討されることが必要である。

学問的な意味での〈知識への接近法〉は、古くから大学教育プロパーな問題として認識され、教室の講義を通じて、あるいは、教師と学生の個人的交流の中で教えられ、語られてきた。読書法あるいは読書論はその中でも最も基本的なものであったと言って良いであろう。読書という行為の様態は時代が新しくなる度に変容しているとも考えられるが、図書館利用教育はその伝統的な方法を一つの目標としている。したがって、その必要性の発想そのものは目新しいものではない。図書館では、比較的古くからこのことに気付き、内容の程度はともかくとしても図書館をどのように利用するかと言う指導をサービスとして、あるいは、図書館PRの一環として行ってきた。しかし、それは今日の大学教育が必要としているものに十分

に対応し得るものではなかった。

今日の、あるいは、これからのと言ったほうが正しいかもしれないが、大学教育が図書館に求めることは、米国のカーネギー高等教育委員会の一つの報告が明確に指摘している。

知識の増大は著しい。その結果もたらされた知識の新しい富の増加は、誰れもその全てを確実に手中にすることができないばかりか、学生時代には、その中の僅かな量の知識をサンプルとして獲得できるに過ぎないことを意味することになる。そこで問題は、高等教育を受ける人びとが社会と自己についての何を知ることができるか、何を知らなければならないか、そして、それらのことを如何にして手に入れるかということであろう。いずれにしても、既存の知識を教えることが高等教育に課せられた役割としてはその重要性を減少しつつあり、生涯を通じての自己開発の技術、方法、とくに図書館を活用する自主的勉学の技術、方法を教えることの重要性が高まってきている。

新しい知識が爆発的に増加する陰で古い知識が見捨てられていく。知識が時代遅れのものとなっていく加速的な割合は、新しい知識が加速的に生産されていく割合と全く同様に重要である。新しい知識は古い知識の上に積み重ねられることもあるが、多くの場合には古いものに取って代っている。したがって学生は学ばべきものと学ばなくてよいものをどう識別するかを学ばなければならない。古い事実と過去の技術は、学生たちのキャリアの終末に至るまえに不確実で無用のものになってしまう可能性が高い。それ故に我々は、学生が広範な新知識の総体をマスターし、彼ら自身の継続的な自己開発をいかにすべきかという問題に対して幾つかことがらを提言したい⁹⁾

米国の高等教育の現状分析を踏まえて、カーネギー報告は、幾つかの対応策を提案しているが、これによると以下のように図書館が大学における学習センターとして発展すべきであると指摘している。

大学図書館は、一般的には次のように認識されている。すなわち、図書館は学生の教育には直接的なかわりの稀い機関である。またそれは書物を保管する場所であり、学生がそれを必要とするならばそこで勉強できる場所である、と。しかし、図書館は学生の教育により一層関与すべきであり、現に幾つかの大学では、図書館がそれに積極的な役割を果たしている。ライブ

リアンは、各自の専門とする主題分野において、学生の自主的勉学に助言を与えたり、クラスやセミナーにおいて研究方法についての講義をすることができる立場にありそのような機会をもっている。図書館それ自体は、コンピュータ・ベース・インストラクションやビデオ・カセットなど新しい教育テクノロジー利用のためのセンターとなり得るものであり、また、それらの資料、資材を活用する自発的な勉学や標準審査機構を通じて単位を取得するためのセンターとしても重要である。

このように、図書館が高等教育プロセスにおいて一層積極的な役割を果たすために、大学経費費の3ないし4%から、多い場合には6ないし8%の予算を必要とするであろう。いずれにしても、ライブリアンは、これまでのように書物の保管という伝統的な役割に終始するのではなく、進んで情報の伝達、情報の活用の方に活躍しなければならないだろう。

以上を踏まえて次のことを提言する：図書館はこれまで以上の予算を得て、より一層積極的に教育過程に参加しなければならない。⁴⁾

図書館利用教育を必要とする上述のような理念的な理由の他に、現実の差し迫った問題として図書館蔵書の増加と施設の拡大がある。これらの問題は、米国に限らず最近わが国においても顕著になってきている。これらは、いずれも、利用形態の複雑さ、あるいは煩雑さを増大させる原因となり、その意味からも、図書館利用の<ノウハウ>が必要とされる理由である。

本文において、これらの問題について詳細に述べることは避けるが、慶應義塾大学の状況を簡単なデータで示せば、情報センター設置の昭和45年から52年度末までに、蔵書数は4つのセンターを合わせて約106万冊から136万冊に増加している。施設の上では、三田キャンパスで現在計画中の図書館拡張計画が実現される昭和56年には、三田情報センター施設だけで最大に見積って約9,500平方メートル程度増加することが予想され、これまでの約2倍弱の広さとなる。

◇図書館利用教育の方法

わが国の多くの大学図書館は、これまででも<図書館利用案内>などを作成、学生に配布したり、新学年度頭初図書館利用のための<ガイダンス・

プログラム>を実施して、図書館利用促進を計ってきた。しかし、これまでのところ、ごく少数の例外を除いて、そうした努力は期待されていた程の成果を上げていない。義塾情報センターの場合も同様の状態である。その理由は、まず、利用を促進すべきサービスの実体が乏しかったこと、つまりカーネギー報告書が述べているような、図書館が進んで情報伝達、情報活用を中心として役割を果たせるような環境、体制、制度、内部の専門的テクノロジーやサービスが十分に整備されていなかったことである。

そのため、義塾における図書館利用教育は図書館外に発展することもなく、教員との連携も不十分であったために、サービスとして、あるいは、教育方法の一つとして整備されなかった。

米国では、多くの大学が米国社会における教育情勢の変容にチャレンジし、カーネギー報告の提言に対する一つの方策として図書館利用教育に着手している。参考のため、末尾にテキサス大学に

おける「図書館利用教育総合計画」⁹⁾の概要を掲げておく。わが国の大学図書館の進むべき一つの方向として、この問題を検討する素材となれば幸いである。

* * *

- 1) Library instruction—the right time and place. *Journal of Academic Librarianship*, May 1978, p. 92
- 2) Catalog and cataloging. *Encyclopedia of library and information science*, vol. 4, New York, M. Dekker, 1970, p. 245
- 3) Reform on Campus; changing students, changing academic programs—a report and recommendations, by Carnegie Commission on Higher Education, June 1972, New York, McGraw-Hill, 1972, p. 23—25
- 4) *Ibid.*, p. 50
- 5) A comprehensive program of user education for the General Libraries, the University of Texas at Austin, 1977, 45, 56 p.

テキサス大学図書館利用教育総合計画の概要

1. 目的：テキサス大学総合図書館は、利用教育総合計画の目的として次の三つのことを掲げ、図書館を学生の自主的、自発的勉学の情報源としての、道具としての、また場所としての利用法の訓練を教師の協力を得て実施する。

- (1) ユーザー・アウェアネス（利用者の頭の中に常に図書館の存在を意識させ、利用者の目を常に図書館に向けさせる）
- (2) オリエンテーション（利用者の足を常に図書館に向けさせる）
- (3) ビブリオグラフィック・インストラクション（図書館を利用者の手の中に）

これらの目的を実現するプログラムは、それぞれ独立したものであるが、段階的に発展させ、最終的にはビブリオグラフィック・インストラクションを行うことにある。

2. ユーザー・アウェアネスの目的とプログラムの要点

- (1) 目的：図書館は大学の中で一つの主要な学習と研究の情報源であること、そして、それぞれの要求を満たすことに役立たせるべき機関であることを利用者に認識させる。

(2) プログラムの要点と方法：a. <かくれた>利用者を含め、諸々の類型の利用者グループの全てにアプローチする、b. 目で見てわかる利用を促進する、c. 大学全体の広報活動のあらゆるチャンネルやメディアを活用し、図書館独自の広報活動もそれらと調整しながら実施する。

<かくれた>利用者とは、図書館を全く利用しない学生のことであり、諸々の類型の利用者とは、①低学年学部学生、②高学年学部学生、③大学院学生、④特殊な学生グループ（新入生、転校生、正規留学生、英語研修留学生、特殊条件の学生、学会・研究集会の登録者など）、⑤教員・研究者、⑥大学事務職員などを意味する。

3. オリエンテーションの目的とプログラム

- (1) 目的：ユーザー・アウェアネスのプログラムを踏まえ、大学内の諸々の図書館やそれぞれのサービスに慣れさせる。具体的には、a. 利用者が各自の必要に応じ、いろいろな図書館の、それぞれのサービスの中から、どの図書館のどのサービスを利用すればよいか習慣的に判断できるようにすること、b. ライブラリアンが利用者に援助するために存在して

いることを認識させ、気軽にその援助を求めるようにすること。c. 利用者の求めている資料が図書館にあるかどうかを知るためにカード目録や雑誌所蔵リストなどについて知らせ、それらの使い方に慣れさせること。

- (2) プログラムの要点と方法：a. <かくれた>利用者を含め、諸々の類型の利用者グループに対し、それぞれの特性に応じたプログラムを実施する。b. 図書館サービスの方針や利用手続の広報には、一致性と均質性の原則を貫く。c. 図書館での広報活動を中心としながら、教育計画との関連性を強めるプログラムを実施する。

なお、諸々の類型の利用者グループの特性に応じたプログラムについて、低学年学部学生、高学年学部学生、大学院学生一般に対するものだけを取りあげてみると以下の通りである。

<低学年学部学生>

- ① 図書館の基本的サービス（閲覧、貸出、レファレンス・サービスはどこで行われているか、また基本的資料（一般図書、リザーブ・ブック、レファレンスブック、雑誌）がどこに置かれているかなどの観点から図書館諸施設に慣れさせる。
- ② 閲覧、貸出手続きに慣れさせると同時に一般的な資料利用に対する心掛けを養わせる。
- ③ リザーブ・ブック、レファレンス・ブック、雑誌などの利用に慣れさせる。
- ④ キャンパスの中の他の図書館の資料やサービスの存在、さらに学外の資料の存在を認識させる。
- ⑤ 必要なときにライブラリアンに相談し、援助や助言を求める習慣をつけさせる。

<高学年学部学生>

〔低学年のときにマスターした上記①～⑤を基本とした図書館利用法に基づいて、次のような内容のプログラムを行う〕

- ⑥ 専攻分野の情報を一般蔵書や特殊コレクションの中から検索できるようにする。
- ⑦ 一般的な図書や雑誌から得られない情報をマイクロ資料、新聞、ドキュメント・ファイルの中から検索、入手できるようにする。
- ⑧ どのライブラリアンが自分の求める情報入手に援助できるかを理解させる。

<大学院学生>

〔大学院学生の場合には、新入生が多いので、上記①～⑧のレベルでのオリエンテーション・プログラムが含まれるが、とくに専攻分野の主題と密接に関連したプログラムが必要である〕

- ⑨ 大学院学生に対する閲覧、貸出手続きに慣れさせる。
- ⑩ 一般的サービスの他に、インターライブラリー・ローン、電算機を利用する情報検索サービスなどの利用に慣れさせる。
- ⑪ どのライブラリアンが、どの専攻分野を担当するビブリオグラファ（主題文献専門家）であるかを知らせ、その援助や助言を求める習慣をつけさせる。

4. ビブリオグラフィック・インストラクション（以下B Iとする）の目的とプログラム

- (1) 目的：学生の情報要求を充足するために、利用者が図書館蔵書、サービス、ライブラリアンの援助を最大限に活用できるようにすることはこのプログラムを最終段階とした利用教育の最終的目標である。そのために図書館は、これらの図書館資源の有効な利用技術に学生に指導し、それに基づいて一人一人の学生が自主的に図書館を利用する能力を向上させること。

- (2) プログラムの二つの形態：a. 自発的図書館利用訓練プログラム、b. 利用者タイプ別の教科目統合図書館利用法開発プログラムと教科目関連図書館利用法開発プログラム。

教科目統合図書館利用法開発プログラム（Course integrated library instruction）とは、図書館利用技術が特定主題分野の教科目に組み入れられたコースで、その目標は主題内容の教育と同時に、教育と学生各自の自発的勉学に必要な図書館利用技術の訓練にある。また、教科目関連図書館利用法開発プログラム（Course related library instruction）は、教科目コースで課せられる数々のアサインメントの解決のための特定の技術の訓練に焦点がおかれる。このプログラムにおいて図書館は、教師からの要求に応じて、学生に与えられた問題に対する情報検索技術を実務的に助言する準備が必要とされる。

(3) B Iプログラムの内容

1. 自発的図書館利用法訓練プログラム
 - a. 出版物の作成と利用
“Selected reference sources” “Pathfinders” “Study Guides” などの作成。
 - b. 「図書館利用の要点」の指導・助言
諸出版物の利用、各種メディア（カセットテープ、ビデオテープ、スライド、サウンドフィルム・ストリップ）と装置の利用。
 - c. 電算機を活用した文献利用法、情報検索法（いわゆるCAIの活用）
2. 利用者タイプ別の教科目統合図書館利用法開発プログラムと教科目関連図書館利用法開発プログラム

1) 低学年学部学生に対するBIの目的と方法

〔目的〕

- A. 百科事典、専門事典の利用技術の習得
- B. 文献検索のための基本的図書館目録利用技術の習得
- C. 雑誌記事・論文の検索技術の基本的習得
- D. 資料の所在確認技術の習得
- E. 特殊な情報検索のための特定のタイプの参考資料の認識
- F. A～Eの情報検索の基本的諸技術を駆使して、効果的情報検索戦術を開発すること

〔方法〕

- A. 教科目統合タイプのプログラム
 - ① 1年「英語」コースの教科内容に上記A～Fの目的を達成するBIを組み入れる
 - ② 教授法はテキストあるいはワークシートの使用
 - ③ 教授法の補助として各種メディアの使用
 - ④ カリキュラム作成において担当教授との協力・援助
- B. 教科目関連タイプのプログラム
教員の要請によって、テキストの提供、クラスルーム・プレゼンテーション

2) 高学年学部学生に対するBIの目的と方法

〔目的〕

- A. 総合図書館の閲覧目録の効果的利用技術に熟練
- B. 専攻分野における学術情報組織の基本概念を理解、その中から必要な情報を検索するための参考資料利用技術に熟練
- C. 専攻分野における文献検索を自主的に計画し、実行する能力を開発
- D. 書誌記述の基本を理解し、専攻分野における初歩的な書誌作成技術を習得

〔方法〕

- A. 教科目統合タイプのプログラム
 - ① 学部、学科、教員への働きかけ：BIに関心のある教員、BIを統合するのに最適なコースの発見、はたらきかけ、協力、最終的には、学生の図書館利用能力を卒業の必須条件とする
 - ② カリキュラムは、学科および教員との協力で開発するが、基本的には、コースの主題に合せたBIのテキストを中心とし、必要があれば、クラスルーム・プレゼンテーションを図書館専門職が行う
- B. 教科目関連タイプのプログラム
コースを担当している教員の要請に基づいて計画。テキストによるBIを中心として、

図書館専門職のクラスルーム・プレゼンテーションを含む

- C. A、Bとは別の図書館独自のBIプログラム

- ① Library research course—高度の図書館利用技術、高度の文献検索法の解説
- ② 特殊な要求に対する各種ワークショップ、タームペーパークリニック、書誌作成法解説

3) 大学院学生に対するBIの目的と方法

〔目的〕

- A. 研究資料一般の検索のための基本的二次資料の利用技術習得と熟練
- B. 専門分野の特殊な研究資料の利用技術習得と熟練
- C. 専門分野の進んだ研究で必要となる複雑な検索技術の習得と熟練
- D. 専門分野の最新情報を継続的に入手する方法の習得と熟練
- E. 研究計画とその研究に必要な資料、あるいは情報をカバーするコレクションの限界を補足する方法の開発

〔方法〕

- A. 教科目統合タイプのプログラム
 - ① 研究科、教員への働きかけ：BIに関心ある教員、BIを統合するのに最適なコースの発見、はたらきかけ、協力
 - ② カリキュラムは、研究科および担当教員との協力によって開発、基本的には、テキストを中心としたBIを行い、必要があれば、図書館専門職によるクラスルーム・プレゼンテーションを行う。
- B. 教科目関連タイプのプログラム
コース担当の教員による要請によって計画する。BIは、テキストを中心として、図書館専門職のクラスルーム・プレゼンテーションを含む
- C. A、Bとは別の図書館独自のプログラム
 - ① Individual consultation—大学院学生個々の研究や論文作成に関しての文献検索計画を援助
 - ② Informal library seminar あるいはworkshop
特殊な資料の利用技術や特殊な情報の検索および収集法についてのセミナーあるいはワークショップ

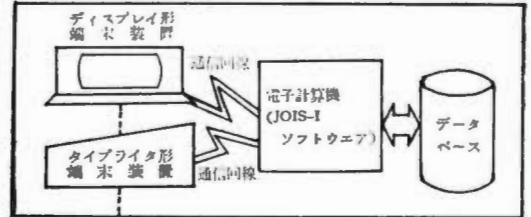
始まった医学文献オンライン検索サービス

最近の医学情報サービスの分野における最も大きな話題は、JOIS (JICST On-Line Information System) の出現であろう。JOIS とは、JICST が、開発した医学を含む科学・技術の分野全般を対象とするオンライン型文献検索システムのことである。

医学情報センターでは、所内に置かれている国際医学情報センターが、昨年10月、この JOIS のターミナルを設置した機会に、同センターと共同利用を協定して、学内の利用に備えている。ターミナルの利用状況は、設置時より本年6月までの8カ月間で、すでに805件に達した。このうち学内研究者の利用は62件であるが、最近は利用が急増する傾向を示している。

JOIS のデータベースは、JICST ファイル (理工学)、CAC (化学)、MEDLARS (医学)、クリアリング (研究動向) の4種類のファイルで構成されている。各ファイルの概要と特性は (表1) の通りである。なお、この4つのデータファイルの情報蓄積総量は、本年7月現在で、400万件を超えている。

JOIS を使用するには (図1) に示す、ディスプレイ型端末装置とタイプライター型端末装置の所定の簡単なキー操作によって、①検索事項の入力、②



第1図 JOIS のシステム

キーワード等の組合せによる検索式 (OR, AND, NOTによる) の入力、③検索結果の出力方式の指定、という一連の応答を行えばよい。これによってデータベースから必要な回答を得ることができる。なお、MEDLARS ファイルについての調査によれば、一質問あたりに必要な検索処理時間は、平均7.3分であり、質問の75%は10分以内で処理できるとの結果が得られている。

JOIS は、検索実例が示す通りすぐれた能力を持っている (検索実例参照)。

この実例は最近数年間の "Saint's syndrome" の文献を求めたものである。Saint's syndrome は (a) Diaphragmatic Hernia, (b) Diverticulosis,

表1 JOIS データファイルの概要

ファイル名	蓄積期間	情報量	分野	情報源	備考
JICST 理工学 文献ファイル	1975年4月 ～現在	約36万件/年	理工学 全般	雑誌 (8,500種) レポート 会議資料	JICST 発行の「科学技術 文献速報」に対応
CAC 化学 文献ファイル	1974年1月 ～現在	約38万件/年	化学 化学工業	雑誌 (14,000種) レポート 図書, 学位論文 特許 (27カ国)	米国ケミカル・アブスト ラクト・サービス発行の 「Chem Abst.」に対応
MEDLARS 医学文献ファイル	1974年1月 ～現在	約25万件/年	医学 薬学	雑誌 (2,300種) モノグラフ	米国国立医学図書館発行 の「Index Medicus」に 対応
クリアリング ファイル	1976年 ～現在	約1.5万件/年	理工学 全般	アンケート結果	国内の公共試験研究機関 約400機関で行なってい る研究テーマを対象。

Colonic, (c) Cholelithiasis の3つの症候が結合されている症候群であり、1955年に冠名されている。しかし *Index Medicus* では、直接冠名による検索は不可能である。したがってこの場合には、①上記 (a), (b), (c), の件名をそれぞれ検索しなければならないがそれには、②上記 *IM* の月刊号6冊、年刊累積版4冊について、合計30カ所を調査する必要がある。これはマニュアルで行った場合、少なくとも調査員1名の5時間以上の作業量になるものと予測される。

一方 JOIS の MEDLARS ファイルには、1974年1月以来の *Index Medicus* の情報が完全に含まれて

いるので、医学図書館員が日常使いなれている *IM* を、同じ要領で JOIS のシステムに適応させれば同じ結果を得ることができる。即ち、① MEDLARS を指定する。②調査期間を限定する。③調査件名を全て入力する。④検索式、この場合は論理積 (a + b + c) で検索回答を求めるという手順を踏めばよいわけである。これによってマニュアル検索の事務作業が全て機械的に処理される。

以上 JOIS は情報の量的な処理に対する時間的な効果ばかりでなく、検索回答の内容においても、使用次第によって、有効な働きが期待されるのである。

検索事例 (Saint's syndrome に関する文献)

データベース MEDLARS

パソコウ *クセキ ハンイ

ケソウ

S --- (1978.06)

20,067 ケ

0 --- (1978.01 - 1978.06)

120,569 ケ

1 --- (1977.01 - 1977.12)

266,305 ケ

2 --- (1976.01 - 1976.12)

277,592 ケ

3 --- (1975.01 - 1975.12)

224,059 ケ

4 --- (1974.01 - 1974.12)

222,270 ケ

S: データベース ノ ハンイ ハ ? S, パソコウ-パソコウ

U: 0-4

S: ケービス オ カイシ シマス 1978.06.05 15:42:38

データベース MEDLARS (1974.01 - 1978.06) 1,110,795 ケ

カイワ パソコウ 41

[1] U: DIAPHRAGMATIC HERNIA

S: 755 ケ

[2] U: DIVERTICULOSIS, COLONIC

S: 363 ケ

[3] U: CHOLELITHIASIS

S: 2229 ケ

[4] U: 1*2*3

S: 9 ケ

[5] U: *P

#001

TI= (THE SAINT SYNDROME)

AU= BRETZKE G

JN= 0044-2542, Z GESAMTE INN MED

VN= VOL.32, IPS.22, PAGE.643-4, 77

CI= () () (DE) ()

KW= AGE FACTORS; AGED; CASE REPORT; *CHOLELITHIASIS/DIAGNOSIS;
*DIAPHRAGMATIC HERNIA/DIAGNOSIS; *DIVERTICULOSIS, COLONIC/DIAGNOSIS;
FEMALE; HUMAN; OBESITY/COMPLICATIONS; PREGNANCY; SYNDROME; ENGLISH
ABSTRACT

#002

TI= (SAINT'S TRIAD, BIBLIOGRAPHIC REVIEW AND PHYSIOPATHOLOGY, CLINICAL CASE CONTRIBUTION)

AU= PARMEGGIANI A; CARELLI FA

JN= 0026-4733, MINERVA CHIR

VN= VOL.31, IPS.18, PAGE.967-82, 76

CI= () () (IT) () (, , 97)

KW= AGED; *CHOLELITHIASIS; CHOLELITHIASIS/DIAGNOSIS;
CHOLELITHIASIS/ETIOLOGY; CHOLELITHIASIS/SURGERY; *DIAPHRAGMATIC HERNIA;
DIAPHRAGMATIC HERNIA/ETIOLOGY; *DIVERTICULOSIS, COLONIC; DIVERTICULOSIS;

(以下省略)

奈良絵本について

松本 隆信

日本では早くから絵巻という独特の形式が行われていたが、その全盛期は鎌倉時代で、数々の逸品を今に残している。その多くは寺社の縁起、高僧の伝説といった宗教的な内容のものである。その後、室町時代から江戸時代前期へかけても、絵巻は依然として数多く作られたが、この頃になると、宗教的なもののほかに物語絵巻がふえてくる。南北朝頃から文学史の上に顔を出してくる。後にお伽草子の名で一般に呼ばれるようになった物語に関する絵巻である。室町時代は下剋上の時代といわれるように、新しい階層の人々が歴史を動かす原動力として登場してくるが、文学の面でも、公家階級中心の文学から、広く武家の諸階層、さらには町人をはじめ庶民の参加する文学へと質的転換を生じてきた。お伽草子は物語文学の上で、それを顕著に示すものであるが、お伽草子が絵巻という形式をとって、文字だけによらずに絵を媒介として享受されるようになったのも、そのような読者層の拡大と深くかかわっていたのである。

奈良絵本と呼ばれる絵入写本は、そのようなお伽草子の類を主たる対象として、室町時代の後期から絵巻と並行して作られはじめ、江戸時代の中期までおよそ三世紀余にわたって盛行した。絵入の冊子本としては日本で最初のものである。奈良絵本を形の上から分けると、縦の寸法が30センチ以上もある大形の縦形本と、半紙程度の普通の縦形本、縦15センチ、横25センチぐらいの横形本の三種類になる。現在残っている本で見ると、ごく初期のものと推定される古色のある本は大形の縦本が大部分を占め、江戸時代に入ってから作られた奈良絵本になると横本が圧倒的に多い。初期の奈良絵本が特別の大形本の形をとったのには、絵巻からの影響があったように思われる。縦



が30センチ余というのは標準的な絵巻の紙高に相当し、挿絵が見開きのページを使って連続する画面になっている場合の多いことなどによって、そう考えられるのである。また、後に横本が一般的になったのも、絵巻式の構図をかまえるには、横長の方が都合よく、かつ経済的であることを知ったためであろう。つまり奈良絵本は、絵巻を簡便にした、いわばその代用品の意味をもっていたのではないかと思われる。

奈良絵本という名称の由来や、その製作者については、まだほとんど分っていない。奈良の興福寺や春日神社の絵所に所属する絵師の手に成ったという説もあるが、その直接的な証拠はない。室町後期の絵巻や奈良絵本には、能書家であり絵も

よくしたといわれる飛鳥井栄雅卿の娘一位の局の作と伝える作品がある。真偽は甚だ疑わしいが、初期の奈良絵本には公家の手さびに成ったものもあったことは考えられる。また、絵としては稚拙な童画風のものも見られる。絵には全くの素人が筆を染めたとしか思えない作品なのであるが、お伽草子という素朴な文芸には、かえってそういう絵の方が内容にふさわ

しく、興味を感じさせる。しかし、大部分の奈良絵本は旧来の大和絵の伝統的な手法を踏襲した絵で、きわめて典型的である。職業的な絵師によって描かれたことは確であるが、作者の個性を感じさせる作品は少ないと言わねばならない。それが美術史の側からの研究を遅らせていたのである。

奈良絵本の挿絵は、それだけを見る限りでは高い価値を与えることのできないのは事実である。しかし、中世という混沌とした時代にあって、文芸の大衆化が押し進められる過程の中で生まれてきた奈良絵本の文学史的役割は看過することができない。国外に流出した奈良絵本に刺激された外国の学者の提唱によって、奈良絵本をめぐる国際的な研究会議が開かれるなど、最近学界での関心も高まってきた。今後、文学と美術の両面から、この正体のよく分らない奈良絵本に解明の手が及んでゆくことであろう。(斯道文庫教授)

医学情報センターと文献探索について



浅井 昌弘

(医学部精神神経科講師)
精神医学

医学情報センターは以前には北里記念医学図書館という名称だったが、

四谷では今も「北里図書館」あるいは単に「図書館」と呼ばれて親しまれている。そこには美しい女性の係員や頼もしい男性職員がいて、医学研究者達の出す難しい注文にてきぱきと応じてくれている。そして、おびたしい量の雑誌や単行本が所蔵されているだけでなく、テレックスやコンピューターを用いて得られる医学文献に関する種々の情報が利用しうる場所となっている。したがって、それは単に図書館（やかた）であるだけではなく、豊富な医学文献情報を取り出せる中枢（センター）になっている訳である。そのようなセンターから、どのような情報を引出して毎日の臨床に応用出来るかは、われわれ1人1人の利用の仕方いかんにかかっているのだといえよう。

「患者さんから出発して患者さんに帰る」と言われることがあるが、これを文献との関連でみると、臨床的知見を文献に照して検討し、その結果を実地診療で役立てるということになるであろう。そういった文献探索においては情報の量と質が問題になってくる。

医学情報センターは雑誌の所蔵量が非常に多く、単行本も古い年代のものまで大切に保存されているので、われわれが文献を探すのにはとても便利である。それは他施設との文献の相互貸借において、医学情報センターが依頼を受けて貸した件数が年間千数百件にのほることを見てもよく分る。この相互貸借制度は大変に良いもので、四谷にない雑誌や本も三田や日吉は勿論のこと他大学

の図書館にあるものも短期間でコピーが入手出来る。特に当センターとの間でテレックス回線を通じている都内の東京女子医大、東京医大、慈恵医大、北里大や杏林大のものは非常に早く1~2日でコピーが得られる。また、国内にはない文献で米国のNLM (National Library of Medicine) や英国のBLLD (British Libraries, Lending Division) にしかないものでもコピーの入手が可能である。その場合に、国内国外のどの施設にはどの雑誌の何巻から何巻までがあるとか、どの本はどここの図書館にあるとか、何大学の何先生が持っているというような総合所蔵目録が種々の角度から整備されているのも嬉しいことである。

一方で、現在は情報過多時代とも言われており、確かに歴大な量の医学文献が連日連夜、世界中で産み出されている。精神医学関係の雑誌だけをとってみても百種類以上のものに関連論文が発表されている。さらに、次々と発行される単行本も多数あり、それらのすべてに目を通すことは非常に困難である。したがって、それらの無数の情報からどのようにしてわれわれ自身に必要なものを選択して取り出し得るかということが重要になってくる。そのような意味でも、医学情報センターのサービスの1つに、希望する雑誌の各号が到着するとすぐに目次内容を各研究者に知らせてくれるコンテンツ・サービスというのがあることは、多忙な医学研究者に喜ばれている。また、最近には新たに種々の抄録誌も発行されており、さらには *Trends in Neurosciences* (月刊, Elsevier) という精神神経科関係のトピックスを紹介する新聞スタイルのものも1978年7月に創刊されている。

具体的にあるテーマについての文献を探す場合には、医学全領域の索引誌として *Cumulated Index Medicus* (1960～)、*Science Citation Index* (1961～)があり、各専門領域別になっている抄録誌である *Excerpta Medica* シリーズ (精神医学関係1948～)と *Zentralblatt* シリーズ (精神医学関係1910～)、また、日本では「医学中央雑誌」、「月刊最新情報目次」があり、さらには医学情報センター独自のものとして1968年以降の医学雑誌 (国内)の特集記事索引カードが作成されているので非常に便利である。*Index Medicus* と「医学中央雑誌」の利用法については、佐藤和貴：精神医学領域における雑誌文献の探索「精神医学」, 20(2); 207—212, 1978が参考になる。また、手作業による文献探索サービスも行なわれており、あるテーマについて過去に必要な年数をさかのぼって日英独仏伊などの文献リストを作ってもらえることが出来る。さらに、コンピューターを使用したキーワードによる文献探索も可能であり、そのシステムとしては、世界的な規模を持つメドラーズ (MEDLARS, Medical Literature Analysis and Retrieval System, 医学文献検索サービス)と日本科学技術情報センター(ジクスト, JICST, Japan Information Center of Science and Technology)によるJOIS (JICST On-line Information System)の2つのものがある。これらを利用すると短時間でかなりの精密さで必要な文献をリストアップすることが可能である。

以上のようにして量的に多数の文献を得ることが可能となるが、そこで問題になるのは重要度や有用性に関する価値判断ないしはウエート付けが大切だということである。論文の題名をみると大まかなことは分かるが、題名が面白そうだからと思って実物やコピーを入手してみると、案に相違してつまらないこともある。抄録誌の Summary をみるとおおよその判断は可能だが、実際に全文をみても内容の差異にびっくりすることがある。

これと関連して孫引きの危険性ということがある。原著 (別刷やコピー) が入手出来ない、已

むを得ず孫引きがされる場合があるが、間違っ引用されてしまうことがあり、特に数値や年代、人名などの誤植がそのまま孫引きで引用されてしまうと、次々と間違いがそのまま引き継がれて行くことがある。何かの機会に別の論文からの数値や年代とのくいちがいが問題になり、苦労して原著を調べてみてはじめてどちらか一方 (時には両方とも) が誤りだと判明する場合もある。孫引きの場合ははっきり孫引きだと文献欄に明記しておけば誤解をふせぐことが出来よう。

一方、各分野の研究では常に他の人がまだ言っていない新しいこと (これをノイエス Neues という) を述べるのがよいとされている。ところが、自分では自分の意見や研究結果は自分の独創であり Neues であると思っても、文献をさかのぼって集めて行くうちにすでに他人が同じことを言っているのにぶつかることがある。このような場合には、もうやられていたのかと残念がるとともに、人間はどここの誰もが似たようなことを考えるものだと感心してしまうことになる。しかし、ひるがえって何が Neues かという議論になると一寸ややこしいことになってくる。科学的普遍性を求める場合は再現性・反復性が重視されるのであり、過去になかった知見が Neues となる。つまり、同じことを実験などで繰返して同じ知見を得ても、それは追試だということになり、確認という意味はあるが、当然で陳腐なことととられる可能性がある。しかし、実際の臨床では1人1人の患者さんは常に新しい症例となるのであって、たとえ病名が同じでも、それぞれの患者さんは1人1人が Neues であるという認識が要求されるのである。

さて、精神医学では文献の果す役割が非常に大切であって、他の臨床各科とくらべてみると、いくつかの特殊性がある。その1つは関連領域が広範なことであり、単に精神医学という専門領域のことだけではなくて、身体的背景のことについての検討が広く臨床医学の各方面に及ぶのは勿論であるが、その一方では人文科学系の分野、たとえば、心理学や教育学、哲学、社会学、言語学などの文献が必要になることがある。これについては、

医学情報センターには *Psychological Abstracts*をはじめ種々の索引誌があるので便利である。また、三田や日吉との連絡がうまく行っているので人文科学の専門文献が容易に入手出来るのは有難いことである。

いま1つの特徴は、単に新しいものが尊重されるだけではなく、古い時代にさかのぼって歴史的に文献を検討することが大切になる場合が出てくることである。人間の精神面を論ずる時には、ある概念の歴史的起源やその後の発展を検討することがぜひとも必要になることがある。古い文献を探索したい時には医学情報センターにある *Index Catalogue (U. S. A., 1880—1961)* や *Catalogue of Scientific Papers (英国, 1800—1900)*, *Index Medicus* の古いもの (1879—1927) をみると、1800年代以降の単行本や雑誌論文のことがよくリストアップされているので便利である。

医学情報センターは古い年代の書籍を所蔵していることが自慢の1つになっており、外国で1800年代や今世紀初頭に発行された単行本などは、まさかあるまいと思って目録をひくと所蔵されていることを知ってびっくりし、書庫へ行ってみるとまさしくその現物を手にとってみることが出来る場合があるのは嬉しい限りである。古い雑誌類も大切に保存されており、精神医学関係では *Archiv für Psychiatrie und Nervenkrankheiten (Vol XII = 1881~)*, *Zeitschrift für die gesamte Neurologie und Psychiatrie (Bd 1 = 1916~)*, *Zentralblatt für die gesamte Neurologie und Psychiatrie (Bd 25 = 1921~)* の実物を身近かに手にとってみることが出来る。半世紀以上も前の偉大な精神科医達の論文をみると、目的として探しているものだけでなく、その前後にあってふと目にとまった論文にも興味をひかれるものが一杯みつかるとは。これは自分で直接に文献を探す時の楽しい余録であろう。古い製本雑誌の皮表紙の色が手について、その手を洗っている時に、何十年も前の人が言っていることに感心したり、研究のヒントやはげましを与えられたように思ったりするのである。

以上述べて来たように、医学情報センターには古い1800年代の文献から、ごく最近の文献までが連続的にきれいに収集、整理されて保存されており、あるいは何らかの手段で入手可能なものであり、塾の医学研究と診療、教育になくてはならぬものとなっている。情報量は次々と増大する一方であって、それを収容するには多大のスペースが必要であり、また整理し利用の便を計るための人員が必要である。図書館運営のためのコンピューターなどによる機械化もよいが、各方面にわたる多角的ニーズにきめ細かくこたえて行くためには、やはり、専門的に勉強し訓練されて経験をつんだ職員が必須のものであり、人間味のある暖かい応答は機械では代用し難いものである。

図書館の良否はその大学の学問的水準を大きく左右するものである。塾の学術を発展させるためには情報センターがさらに充実されて行くべきである。具体的には、可及的に十分な予算の措置と優秀な人材および場所と建物の確保、種々の機械をそろえて行くことが必要である。そして一方では、情報センターを利用する側も、積極的に種々の資料・文献やサービスを活用し、大切に扱って行かねばならない。所蔵されている雑誌や単行本や索引誌その他の資料、そして何よりも優秀なスタッフの人達は、塾全体の共通にして不可欠な財産であるという認識が大切であろう。

医学情メモ

◇国際医学情報センターの窓口の変更

これまで閲覧室内にあった国際医学情報センター利用者の受付窓口は、塾内利用者との利用上の混乱を避けるため、図書館北側の入口に変更された。

◇密集式移動書架の新設

地下事務室に収容能力約3万冊の密集式移動書架を新設し、昭和50年以来小金井地区に別置していた旧分類図書約2万冊、並びに閲覧室の開架図書約4千5百冊を収容した。

◇指定寄付金

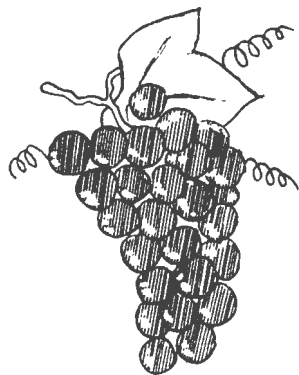
昭和52年度は図書費として医学部第5回生の82万円など計10件、総額250万円を受領した。

スイス・ホリデイズ

藤 沼 貞 弘

今年の夏の暑さは格別であって、昨年8月の冷夏がなつかしくなるとよく聞かされる。欧州の夏は昨年同様異常気象で冷夏が続いているという。昨年10月末チューリッヒに着いた時、夏には雪が降ったと聞き、寒さを覚悟していたところ、ほぼ日本と同じ秋の気候でほっとした。チューリッヒ大学でいくつかのインタビューを終えて、一時的に解放されたところで、アルプス行の計画をたてた。観光登山は、すべて登山電車で済ましてしまうとは聞いていたが、そこは何事も道具を揃えないと気がすまない性格——時には揃えて満足してしまい何もしないこともある——パーゲンのザックを一生懸命物色してみたが、日本と同様、結局適当なものはなく、普通売りのザックを買うはめになってしまった。靴は長靴と登山靴のかけあわせ特大サイズのものを安く買い小さめの足に工夫してはかせることにした。

チューリッヒから首都ベルンまでは、都市間特急による快適な旅、ベルンでミラノ行きの国際急行列車に乗り換え、更にテュールでローカル列車へ。雨の中を線路工夫たちが黒のチロリアンハットをかぶり、オレンジ色のカッパを着て作業しているのが、昔ディズニイの漫画映画に出てくる小人たちのチョコチョコ作業する姿に似て、一瞬童話の世界に迷い込んだ思いがした。童話の世界は、車窓から眺める沿線の風景にも展開する。白壁の時計塔がすべての村の人々にみえるように建てられた教会、周囲の緑の小牧場に調和した色とりどりの農家、湖岸を快走する列車の車輪にうちよせてくるさざ波、対岸の雲に覆われた山々の趣きなど、スイスの人々が、その恵まれた自然を童話の世界にまで高めている観光努力には素直に敬意を表すことにした。



二つの湖を結ぶ運河の町、山の基地インターラケンで登山電車に乗り換え、たまたま乗り合わせた東京歯科大学のS助教授、オーストラリア留学中で、家族をシドニーに残して、アメリカ、ヨーロッパの各大学訪問中、一息いれて山をおとずれたという、旅は道連れ、3週間以上日本語での会話を途切らしたためか、舌は嫌が応でも滑かに回転し、おしゃべりに熱中し、景色がさっぱりみえなくなってしまい、峡谷の美しさにあわせてカメラを向ける等、おしゃべりと眺望は両立せず、もどかしい思いをした。次第に雄大な山々が雲の合い間に顔をのぞかせ、終点近くでは、雨の中に巨大な岩の壁が黒々と迫ってくるのが不気味な印象を与えた。山の村グリンデルバルトのホテルはシーズンオフなので、ほとんど閉鎖しているが、観光客もそれ以上に少なく、泊まるのには不自由しない。室のベランダ正面をふさいでおおいかぶさってそびえるのはアイガー北壁とわかった。迫る夕闇の中に雨に濡れて黒光りする山肌が多くのアルピニストの生命を貪り喰う悪魔が両手にマントをつかんでひろげる様子にもみえるし、人間の力をあくまでも拒み続ける自然の城砦とも思える。

S氏とコーヒーを飲み、レストランに行くと、隅では老人たちがカードに夢中になっており、我々がおしゃべりをしている間に、次々と周りのテーブルはカードをする人々で埋っていく。時間が経つにつれて序々に若い人も加わり、長い冬の夜を過ごす寄り合いの場にぎやかさを呈してきた。山に囲まれた里の夕闇は早くたれこめるが、実際の夜までにはまだ相当の時間があり、ホテルに帰り休んで外を眺めると、アイガーの壁は刻々と闇の中に溶けこんで、みえるのはただアイガーの壁にそって走る登山電車のライトだけになってしまった。明日の山行を考えると、昼間の童話の世界から大人の世界への現実感を、静かな興奮の中に、アルプスの山麓で味わせてくれるのであった。

(塾監局 人事部長付)

日吉情報センター(藤山記念日吉図書館)の改装計画

天野善雄

(日吉情報センターP. S. 課長)



◇はじめに

藤山記念日吉図書館
(以下単に当館と略す)

は昭和33年に建設され、以後教養課程の学生を中心にして、そのサービスを提供してきた。教養課程の学生とは、一口に言えば苦しい受験戦争を終え、来たるべき専門課程への門口に立っている学生である。彼等は年齢にして18歳から20歳、丁度人格の形成期としても重要な時期にあっているのである。

義塾の4つの情報センターのうち当館のみは大部分の利用者が1年ないし2年で通過してしまうという大きな特色もっている。従って大半の学生は、利用の方法、蔵書の位置などを充分に理解しないまま日吉を去ってしまうのが実状である。

このような利用者を対象とする当館として配慮しなければならない点は、第1に使い易さという点である。折角学生が図書館に来て、蔵書が分りにくい状態で配架されていたり、利用手続きが繁雑であったりしたのではなんにもならない。どんな学生が利用に来て、図書館を簡便に活用できる状態にしておきたいものである。第2に配慮しなければならない点は、幅広い教養書の収集である。教科書や学術書の収集は大学図書館として当然のことであるが、人格形成の滋養となるような基礎教養書も多数収集することが肝要である。

勿論収集された基礎教養書が使い易い状態で配架されていることも忘れてはならない。

このような観点にたって当館を振り返ってみると、必ずしも充分な配慮がなされているとはいえ

ない点がいくつかあげられる。パブリックサービス課ではこれらの点を改善するため、改装計画の検討を進めてきた。

本報告書では、一連の改装計画立案のプロセスから、計画の実行、完了までの概略を報告する。

I. 計画の立案

図書館の閲覧業務は利用者との応接があるため、就業時間内に全職員が一堂に会することができない。パブリックサービス課でもこの状態は同じである。そこで当館では昨年7月より毎週1回業務終了後に定例の連絡会をもつことにした。本計画の立案はすべてこの連絡会を通じて行われた。連絡会の中で確認され、検討対象となった当館のその当時の問題点は以下の通りである。

A. チェックポイントが2ヶ所に分散

当時のパブリックサービス課は、兼任課長1名、課長代理1名、課員5名という編成であった。チェックポイントとして貸出カウンター、レファレンスルームがそれぞれ異なるフロアに位置していたため、これだけの要員で両方に職員を配置しなければならなかった。貸出カウンターの最低所要人員が2名、参考係が1名なので、昼食時等の交代を考えると最低6名の職員が必要である。このため管理職もカウンターのローテーションに組入れなければならず、職員の休暇があれば、ただちにテクニカルサービス課への応援を求めなければやっていけなかった。

B. 閲覧座席が不足している

妙な話だが、小学生から高校生までは校内に自分の机を持っているが、大学生になると(特に教

養課程では)自分の机というものがない。このような点からも大学では図書館の存在、しかも多くの収容能力を有した図書館の存在が重要になってくるのである。ところが当館には閲覧座席が372席しかなく、昼休み時などは座れない学生が閲覧室や図書館入口附近でうろうろするような状態であった。文部省の大学設置基準では、図書館の閲覧座席を収容定員の5%以上と定めており、その後の設置基準改善要項では、同じく10%以上とされている。日吉は学生定員が9,180名なので5%とすると459席必要であり、372席ではわずか4.1%にしかない。

C. 入出庫の手続きが面倒である

もともと出納制でスタートした当館は、数年間の曲折を経て、最近ようやく全面開架制となった。しかしながら開架制をとりつつも、一部に出納制時代の名残りがあったことは否定できない。その端的な例が入出庫の際のチェックであろう。書庫の出入口に貸出カウンターを置き、入出庫の際はすべてカウンターで学生証を受渡すシステムとなっていた。貸出カウンターでは学生の出入りを常にチェックしていなければならないため、職員がカウンターにしばりつけられている状態であった。又閲覧室で閲覧する場合はすべて館内閲覧手続きを必要とし、館内閲覧中の学生の学生証も預かっていたので、業務は極めて繁雑であった。

D. 目録の位置が不便である

図書館にとって、特に当館のように教養課程の学生を対象にした図書館にとっては、その教育的見地からも、利用者の目録利用を促進することが肝要である。そのためには目録の位置などの面で、職員が常に利用者の目録利用を指導し易いように配慮されていなければならない。しかるに当館の場合、これも出納制の名残りと思われるが、目録カードの位置が書庫と離れており、しかも書庫と目録カードの間には、貸出カウンターと閲覧室出入口の仕切りがあったので、目録利用と書架の閲覧が一体的になりにくい状態にあった。

E. 雑誌の取扱いが不統一である

当館の蔵書中91.6%は図書で占められており、残りが製本雑誌である。この比率からも分る通り、当館における雑誌の利用はあまり高くない。そのせいか雑誌の取扱いは従来あまり配慮されないうままになっていたようである。例えば毎日受け入れられる未製本雑誌は貸出カウンターとはフロアの異なる1階のレファレンスルームに置かれ、製本雑誌は貸出カウンターからしかアプローチすることのできない地下書庫に置かれていた。しかも閲覧用雑誌目録はレファレンスルームに配置されていたので、貸出カウンターで雑誌の状況を正確に把握することは不可能な状態であった。

II. 対応策の検討

以上の問題点に対して、連絡会が検討を通じてたてた対応策は以下の通りである。

Aのチェックポイントが2ヶ所に分散している問題に対しては、

1. 参考業務機能を貸出カウンターに隣接させる。
2. 参考図書を2階閲覧室に移動する。
3. 2階閲覧室の座席を割愛する。

Bの閲覧座席が不足している問題に対しては、

1. レファレンスルームを閲覧室とする。
2. 新聞閲覧台をコンパクトな新聞架に取り代えて、あいた部分に座席を増設する。

Cの入出庫の手続きが面倒であるという問題に対しては、

1. 個人用ロッカーを整備して、2階閲覧室及び書庫の利用者にはカバン類を持込ませないようにし、その代り学生証を預からなくする。
2. 2階閲覧室での閲覧には館内閲覧手続きを廃止する。(但しそれ以外の閲覧室に持出す場合は従来通りの手続きとする。)

Dの目録の位置がよくないという問題に対しては、

1. 2階閲覧室の出入口及び仕切りを取外し、

階段の昇りきわまで移設する。

2. 目録を2階書庫入口附近に移動する。
3. 貸出カウンターを現在の出入口近辺まで張り出す。
4. 目録のあった場所に最新の文庫本、新書版を置いて魅力的な感じをもたせる。

Eの雑誌の取扱いが不統一であるという問題に対しては、

1. 未製本雑誌架を貸出カウンターのある2階閲覧室に移動する。
2. 雑誌目録を図書目録と同じ場所に移す。
3. 製本雑誌の書架が一部古い木製で、収容能力が悪いのでスチール製に取代える。

以上のような対応策が考えられるようになった段階で、丁度昭和53年度の予算申請時期にあたった。連絡会では予算申請の中に改装計画を盛り込むべく、対応策の具体的な裏付け作業を急いだ。

Ⅲ. 成案の作成

本改装計画は、単にモノの位置を動かすだけの部分もあるが、大部分が新規に備品を購入したり工事を伴ったりするものであった。従って予算の確保なくしては到底実現不可能であったので、予算申請時期までに計画の成案を作成しておかなければならなかった。

改装計画の成案すなわち予算申請案は11月中旬に出来上った。内容は以下の通りである。

(A-1)

参考業務機能を2階閲覧室内(40m²)に置く。

(A-2)

参考図書(約6,000冊)すべてを2階に移動できないので、一部を地下書庫前室に別置き、残りを移動する。別置の目安は、利用頻度が低いことが前提で、イ. 旧版、副本であるもの、ロ. 特定の限られた分野を対象としたもの、ハ. 参考図書扱いが不適当であるもの、ニ. 古すぎて資料的価値のないもの、ホ. 内容が適当でないもの、などと考える。2階閲覧室に参考図書用書架を設置する。書架は複式4連8段が

4本で、1棚25冊として6,400冊収容可能となる。このうち $\frac{3}{4}$ はレファレンスルーム既設分を使用する。

(A-3)

2階閲覧室に入って左手の40m²を参考業務用として使用する。そのため6人掛4脚の閲覧座席を割愛する。

(B-1)

レファレンスルームの書架はすべて撤去し、閲覧室とする。

(B-2)

新聞閲覧台はスペースをとり、備品としてもかなり古いのでこれを廃棄し、コンパクトな新聞架を採用する。あいた部分を中心に閲覧座席を22人分増設する。

(C-1)

小閲覧室前をロッカールームとし、ここに個人用ロッカー180人分をいれる。既存の36人分と合わせて216人分のロッカーを確保する。

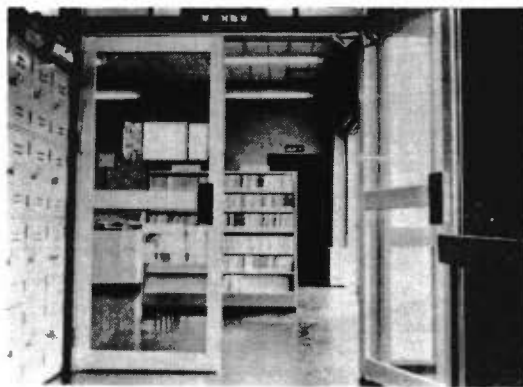
(C-2)

館内閲覧手続きを要する場合は極く限られるので、53年度以降館内閲覧の統計を廃止する。

(D-1)

出入口と仕切ガラスをそのまま移設するがドアは木製でなく透明ガラスに変える。新刊ガラスケースも作りつけなのでそのまま移設する。2階閲覧室に階段の昇降音が響くようになるの

移設した第一閲覧室入口



で、階段に防音工事を施す。

(D-2)

撤去した出入口及び仕切りの位置まで貸出カウンターを張り出し、閲覧室を見通せるようにする。

(D-3)

目録室あとをブラウジングコーナーとする。

そのために、新刊展示ケースだけでなく最新の文庫本、新書版を置き、手軽な利用を促進する。

(E-1)

2階閲覧室と書庫の境に未製本雑誌架を移設する未製本雑誌の閲覧スペースを確保するために、2階閲覧室の閲覧機の向きを90度変える。

(E-2)

木製書架が、複式4連8段1本、複式3連8段3本、単式4連8段1本あるので、これらをスティール書架にする。

以上の成案を臨時予算として一括申請したところ、幸いにもほぼ完全な姿で認められた。

IV. 実行段階

今回の改装計画では、館内閲覧システムを大幅に変更すること、カバン等のロッカー収容を義務づけることなど、学生の図書館利用方法にいくつかの改正点がある。毎年利用者の約半数が新入生

貸出しカウンター、奥に目録と2階書庫がみえる



で占められる当館としては、一連の改装を新学期の授業開始前に終わっておきたかった。それができないと、場合によってはしばらく古いシステムを適用し、すぐに新しいシステムに変更するというステップを踏むことになり、利用上の混乱が起るのではないかと心配があったからである。そこで改装作業の実施を出来る限り短時間で終わらせるために、予算の決定をみた3月下旬から早々に改装準備にかかった。実行経過を日程の順に表わすと以下の通りである。

実行経過

3月19日

- 2階閲覧室の閲覧機の配列(向き)変更
- 2階閲覧室の参考図書設置予定場所の閲覧機を撤去(当初6人掛4脚の予定が、配置の工合で5脚となり、結局30人分を撤去した)
- レファレンスルームより未製本雑誌架を2階閲覧室に移設

4月4日、5日

- 参考図書の一部を地下書庫前室に別置

4月5日

- 2階閲覧室出入口ドアの撤去

4月6日—8日

- 書架撤去と移設のため、参考図書を書架から一時レファレンスルームの床に別置(レファレンスルーム閉室)

4月7日

- 貸出カウンター移動

4月11日

- レファレンスルーム書架の撤去と2階閲覧室への移設(複式12連7段を移設、複式4連7段を新設)
- ロッカー72人分搬入、設置

4月12日

- 参考図書を2階閲覧室に移動

4月13日

- 新聞閲覧台の廃棄、新聞架の搬入

4月15日—5月2日

- 2階閲覧室出入口及び仕切りガラスの撤去と移設工事

4月17日

- 閲覧機、椅子の搬入

4月18日

- 目録カード(著者、書名)を2階書庫入口に移動

4月20日

◦ 地下書庫の木製書架を撤去

4月21日

◦ 地下書庫にスチール製書架を設置

5月2日

◦ ロッカー108人分搬入、設置

5月4日

◦ 専用文庫新書棚新設

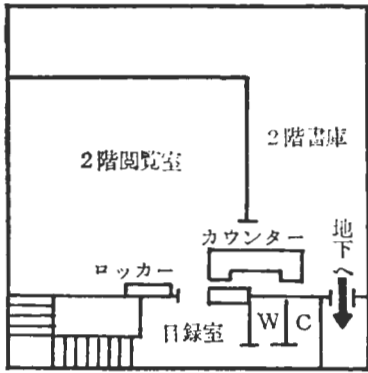
5月16日

◦ 分類目録を事務室前移動

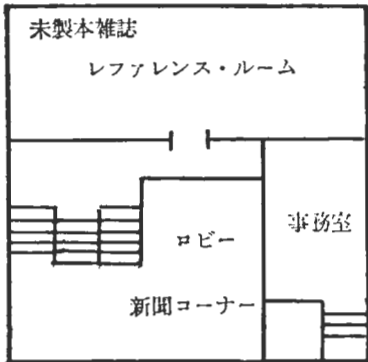
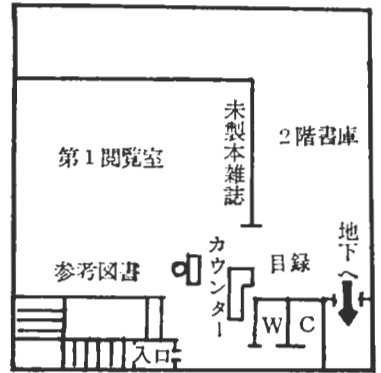
5月23日

◦ 最新文庫本、新書版を専用棚へ移動

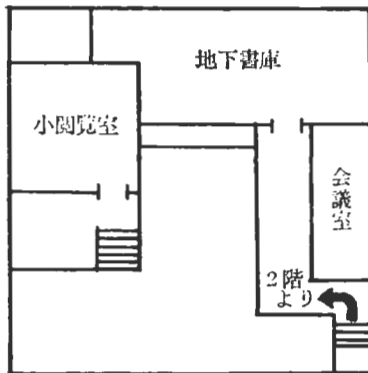
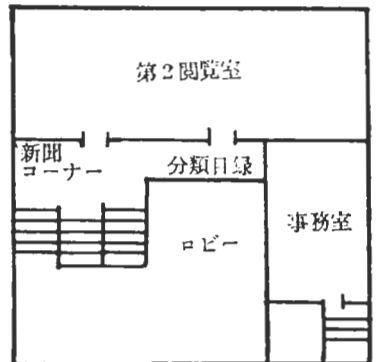
改装前、改装後の館内略図



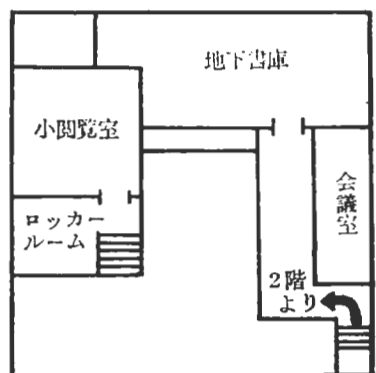
(2階) 改装前 ← → 改装後



(1階) 改装前 ← → 改装後



(地階) 改装前 ← → 改装後



一連の改装は、準備にかかってから約2ヶ月を要したことになる。当初予定した新学期開始までに新しいシステムへ変更するという面では、授業開始前日にロッカー72人分が入り、既設と合わせると、108人分となったので、不十分ながら学生を混乱させることなく実施することができた。

しかしながら全体を通していえることは、計画の甘さというか、計算違いがいくつかでてきた点である。例えば2階閲覧室は24人分削除の予定であったところ、通路などの関係でどうしても30人分削らなければならなくなったことや、同じ2階閲覧室の机の配列変更では、机備付けの電気の関係で予定外の電気工事が入ってしまったことなどである。図面上だけでなく、実際に動かしてみないと判然としない事柄もあるが、やはり詰めの甘さとして反省しなければならない。

なお今回の改装により各室の使い方が異なったこともあり、部屋の呼称を以下のように変更した。()内は閲覧座席数を指す。

旧	新
2階閲覧室 (170)	第1閲覧室 (140)
レファレンスルーム (74)	第2閲覧室 (170)
新聞ロビー (68)	ロビー (90)
小閲覧室 (60)	小閲覧室 (60)

総座席数は460席となり、最低ではあるが基準の5%は満たすことができた。

V. 今後の課題

従来のパブリックサービス課は、貸出カウンターとレファレンスルームが2階と1階に分れていたため、少ない職員を2ヶ所に配置しなければならず、1人でも休暇があるとテクニカルサービス課に応援を依頼するような有様であった。ぎりぎりの職員でサービスしていたため、仕事のやり方が基本的には学生の利用を待機している状態であった。1人でもカウンターを離れて学生の相談にのろうとするとカウンター業務そのものが覚束な

くなることもしばしばであった。

今回の改装によってこれらの問題がかなり軽減したことは事実である。職員の融通性はつけ易くなったし、館内閲覧手続きがなくなり、入出庫のチェックもなくなったので、カウンター業務は待機の姿勢から質問を先取りできる状態にもなった。しかしながらそれだけでは形式が整っただけで、従来の問題点の半分が解消したにすぎないと思われる。形式に内容を加味したサービス、あるいは利用指導體制を確立しなければならない。この点が今後の課題であろう。

改装後の連絡会もこの点が話題になった。

検討経過は割愛するが、最終的に対応策として確認された事柄は以下の通りである。

1. 職員のインサービストレーニングの実施
(レファレンスが近くなったので、当然貸出カウンターにも参考質問が飛込んでくる。これに対処するためにカウンター職員にもレファレンスの基礎知識が要求される。)
2. 各科目別基本図書リストの作成
(利用指導、読書指導のためのツールとして、日吉で開講している学科目に則した基本図書リストを作成しておく。)
3. 目録コーナー、書庫内の巡回サービスの実施
(目録の使い方や図書の配架場所の分からないような学生がカウンターに質問してくるまで待っていないで、こちらから出向いて行って指導できるようにする。)

以上の諸点はすべて53年度パブリックサービス課の業務計画に含まれることになり、順次実現の方向に向かっている。これらの点が具体化されることによって、単にモノを動かしただけの改装を真に実のあるものにするのが可能となるだろう。

外国人利用者と図書館

鈴木 富弥夫

最近、三田情報センターをよく利用する人の中に、スリランカから来た訪問教授がいる。主に研究しているのは日本とスリランカの貿易問題で、その分野の資料をよく利用している。日本語は殆ど話せないため、カウンターの担当者としての責務上何とか英語で利用方法や関係する図書のある場所を説明した。すると、経済学部と商学部の図書の各分類項目が何を意味するのかを、英語で知りたいと言う。今まで特に英訳したことはなかったため、新たに分類表の英語版作成を試みた。日本十進分類表や国際十進分類表等を参考にすれば簡単にできるだろうと思っていたが、やってみるとなかなか思う通りにはできなかった。分類表の相当する分野を探したり、事項索引を調べても見つからない用語があったり、また「経済学辞典」や「社会科学大辞典」等で用語の確認をしたり、収書方針を参考にしたりで、予想外に時間がかかってしまったが、とにかく経済学部と商学部の単行書の分類表の英語版を作成することができた。

訪問教授の他にも訪問研究員、留学生がおり、合わせると年間約200人も外国人が国際センターに関係している。義塾の国際交流事業の推進にともなって、将来もっと多くの外国人が訪ずれるものと思われる。そしてこれらの人の多くが図書館を使うことになる。

情報センターは多くの外国人に使われているが、そのうちどれほどの人々が資料を有効に利用し、目的を達成しているのかについて

は多少の疑問が残る。というのも、なかには日本語に堪能な人もいるが、日本語はあまり得意ではないとか、あるいは全く話せないという人がかなりの部分を占めていると思われるからだ。特に三田情報センターでは、歴史も古く、いろいろな変遷があったため、目録体系が複雑になっており、職員でも何年か経験した人でないと十分に使いこなせない。短期滞在の人が多く、しかも日本語が不自由な人々が、一体どれほどその利用方法を理解できているのかと思う。実際にこれらの人々に接していると、まだよく理解していないが、何も質問せず、こちらも親切心で説明してや

りたいが、外国語が自由に話せないので、ためらい勝ちになってしまう。ある訪問教授によると、日本語に自信がないために緊張し、あまり話せなくなってしまったのだそうだ。このような人がリラックスして、しかも十分に資料を活用できるような状況を作っていかなければならないと痛切に感じる。



この種の問題は、新図書館計画が具体化されてきている現在こそ、真剣に取り組まなければならない大きな問題であろう。解決策として先づ考えられるのは、外国人利用者の多い上智大学国際学部図書館や国際キリスト教大学図書館等では既に実施されているが、表示の英語併用と英語による利用案内の作成である。特に利用案内は、外国人研究者には明確な目的を持って資料を利用する人が多いため、前述の分類表の英訳を含め、研究者用として満足のゆくものを作る必要がある。その他、利用傾向、特質を調べ、収書計画や情報センター職員の語学研修などを含めた幅広い角度からの対応策を考え、国際化時代の情報センターのあり方を考えていかなければならない。(三田情報センター閲覧課)

三田情報センターの展覧会

石川 博道

(三田情報センター副所長)



図書館が愛されるとは大切にされよく利用されることだと思うが、そのためには魅力あるものでなくては

ならない。文豪菊池寛はよくよくでないとは本は買わない主義であったから図書館をよく利用したらしい。彼の冷眼居雑談によれば「この間上野の図書館に行ったが、朝八時前に三四百人も列を造っておって大変だった。……上野の図書館では椅子を一寸捻ったり寝転がったりすると直ぐに注意されるので何だか窮屈らしい感じもする。大橋図書館は薄汚いのがいけなかったが一種の落つきがあって割合に気楽でよかった。日比谷図書館は居心地がいいのでよく通った」(書物往来創刊号)とある。つまり利用しやすさと読書環境の良さが菊池寛にこの文章を遺させたのである。彼の図書館の利用法は大学に於けるそれとは相違していたにちがいないが、然し何より利用者としての彼の期待を満足させるものが、そこにあったことはたしかである。この利用者を満足させる条件をととのえることが我々大学図書館人の心がけるべき責務だと思うのだが、それは極めてわかり切った事柄でいて存外にむづかしい。施設の充実、豊富な蔵書、利用の便宜さ、いずれも大切であるが、私はひとつ人間の問題、特に利用者と館員相互の人間関係を重要視したい。それはアットホームな親しいふれ合いが可能であればすぐに得られる相互理解が、如何に重要なファクターとして魅力ある図書館造りに役立つことか、まさに量り知れないものがそこにあると感ずるからである。

我々図書館人は常に受動的には利用者の要求に応えこれを満足せしめると共に、能動的に学問領域の拡がりに即応し未知の新知識を摂取せしめる

ことにも積極的でなければならない。私はこのいわば啓蒙活動の一翼を荷うものに資料の展示及び広報活動があると思う。学生を例にとればその一人一人のもつ専攻分野と凡そ対象も内容も異なる未知の世界を顕現することによって、新しい学問研究の情熱をそこにかき立て勉学意欲を増進せしめることに意義と目的があると言える。それは時に利用者を図書館になじませ、或は読書に疲れた一時をいやすなど色どりにも似た効果がある。

三田情報センターは図書館の所蔵する和漢洋の善本稀書を駆使し、時に学部研究室・斯道文庫・塾史資料室及び研究者個人もしくはグループ等の讚助協力を得て年に数回、規模の大きな展覧会を開いている。これ以外特定のテーマで小展示を若干回行うほか、数多い美術書の日替り展示、学生のための新着図書展示、特に昨秋からは教員を対象にその新刊紹介を新研談話室において行っている。展示計画の概要については展覧会の場合でいえば大凡次の基準によって企画されて来ている。

1. 福澤諭吉・慶應義塾史研究に裨益するための基礎資料の紹介
2. 義塾の記念事業・学会開催等を機に表敬的に行う所蔵資料の展示
3. 歴史上著名な人物・事象を記念するための関連資料の展示紹介
4. 義塾に所蔵する学術的に貴重な善本稀書の公開(特定のテーマを設定する)
5. 新収コレクションの紹介

ここでは戦後に於ける展覧会を一覧表にして次に表示する。但し、図書館が図書館以外で開かれた展覧会にその蔵書の出展をもって協力したケースは数多くあるが、主催もしくは共催でないものについてはこれを省いた。

1. 日本中国学会第4回大会記念・中国関係稀
観書展(27.10.18~19, 有, 言語文化研
究所)
2. 慶應義塾図書館蔵・日本古刊本展
(29.4.24~27, 有)
3. 室町物語・舞・古浄瑠璃仮名草子本展
(30.11.27, 有, 国文学研究室)
4. 私大図協第17回総大会開催記念・慶應義塾
図書館蔵日本古書目展(31.5.19~22, 有)
5. 反町十郎君寄贈・武家文書展
(31.10.13~15, 有)
6. 福澤先生誕生記念会出品・相良家文書展
(33.1.10, 有, 国史研究室)
7. 慶應義塾図書館蔵・日本中世文学資料展
(33.5.23~25, 有, 国文学研究室)
8. 松永安左エ門寄贈記念・亀井南冥・昭陽著
作展(34.1.20~21, 有, 斯道文庫)
9. 法学部法律学科開設70周年記念・明治前期
民事法関係立法史料展(35.10.14, 有,
法学研究会)
10. 東方学会主催第6回国際東方学者会議参加
者歓迎展(36.5.27, 有, 斯道文庫)
11. 慶應義塾図書館蔵・日本文学善本展
(38.6.15~17, 有, 全国大学国語国文学
会)
12. 東方学会第13回会員総会・慶應義塾大学所
蔵・漢籍古鈔本展(38.11.7, 有, 斯道
文庫)
13. 第33回社会経済史学会大会・古文書展
(39.5.9, 有)
14. 福澤諭吉全集完成記念・福澤先生展
(39.5.12~16, 有, 塾史編纂所)
15. 簿記の語源に関する資料展
(39.5.28~30, 有, 西川孝次郎)
16. 国際大学協会第4回総会参加者来塾記念展
(40.9.4, 有, 文学部, 斯道文庫, 塾史
編纂所)
17. 国際大学協会福澤先生関係資料・図書館所
蔵古刊本展(40.10.6~8, 有, 斯道文庫,
塾史編纂所)
18. ジャン・ポール・サルトルとシモーヌ・ド・
ポーボワール展(41.9.19~24, 有, 仏
文研究室)
19. 慶應義塾所蔵・幕末伝来蘭英書展
(41.12.8~10, 有)
20. 慶應義塾所蔵・「資本論」刊行百年記念展
(42.11.7~9, 有, 経済学会)
21. 慶應義塾命名百年名誉博士授与記念・松永
安左エ門・高橋誠一郎両君資料展(43.
5.18~20, 有)
22. 重要文化財指定記念・慶應義塾図書館蔵善
本・稀本展(43.12.12~14, 有)
23. 江戸市民資料展
(45.5.25~29, 有, 北里記念医学図書館)
24. 没後10年・野村兼太郎博士資料展
(45.6.25~27, 有)
25. 新律綱領展一発布百年記念一
(45.10.14~17, 有, 手塚豊)
26. 六十周年記念・三田文学展
(45.11.10~13, 有, 三田文学ライブラ
リー)
27. 斯道文庫創立十周年記念・近菟善本展
(45.12.1~4, 有, 斯道文庫)
28. 三田評論創刊700号記念展
(46.1.19~22, 有)
29. 明治初期慶應義塾資料展一三田移転百年記
念一(46.4.20~22, 有, 塾史資料室)
30. 慶應義塾所蔵・中世古文書展
(46.5.26~29, 有, 高橋正彦)
31. ホヂソン展一日本英文学会年次大会を記念
して一(46.12.4~5, 有, 日本英文学会)
32. 幸田成友著作集刊行に際し幸田成友名誉教
授を偲びて(46.12.8~10, 有)
33. 学問のすすめ発刊満百年記念展
(47.5.17~19, 有, 塾史資料室)
34. 第14回蘭学資料研究会大会・「幸田文庫」
日蘭通交史資料展(47.6.17~19, 有)
35. 吉野秀雄歌碑除幕記念展
(47.6.30~7.1, 無, 吉野登美子)
36. 公害関係文献情報サービスと資料展

- (47.10.3~6, 有)
37. 逝去50年記念・田中幸一郎博士資料展
(47.11.10~11, 有, 文学部, 法学部)
38. 図書館新収俳書展
(48.9.20~22, 無, 国文学研究室)
39. 没後20年記念・折口信夫著作資料展
(48.10.1~6, 無, 国文学研究室)
40. 初期日仏文化交流展—福澤諭吉とロニイを中心として—(48.10.15~17, 有, 仏文研究室)
41. アダム・スミス生誕250年記念展
(48.10.23~26, 有, 経済学会)
42. 泉鏡花遺品展
(48.12.13~15, 無)
43. ローベルト・ムシル展
(49.5.10~14, 有, 日本独文学会)
44. 三田演説会発会満百年記念・「演説」の発達に関する資料展(49.6.5~7, 有, 塾史資料室)
45. 慶應義塾図書館蔵本による目で見える日本文学の流れ(49.10.23~25, 有, 国文学研究室)
46. 歴史人口学展
- (49.11.13~15, 有, 経済学部速水研究室)
47. 日吉出土考古名宝展
(50.6.4~6, 無, 民俗考古学研究室)
48. 義塾に学んだ人々展—第1回—
(50.10.15~17, 有, 塾史資料室)
49. フランス官報とパリ・コミュニケーション資料展
(50.11.5~8, 有, 経済学会)
50. 福澤諭吉の生涯と生活展—その遺品を中心として—(51.5.11~14, 有, 塾史資料室)
51. コルディエ文庫・欧米人の中国研究書展
(51.10.21~23, 有, 斯道文庫)
52. 足尾鉍毒事件と田中正造資料展
(51.10.27~29, 有, 小松隆二他)
53. 義塾に学んだ人々展—第2回—
(51.11.17~19, 有, 塾史資料室)
54. 西南の役と慶應義塾展
(52.5.25~27, 有, 塾史資料室)
55. 慶應義塾図書館蔵・御伽草子絵巻と絵入本
(52.10.12~14, 有, 松本隆信)
56. 義塾に学んだ人々展—第3回—
(52.12.6~8, 有, 塾史資料室)
57. 慶應義塾大学蔵・中世文学資料展
(53.5.20~23, 有, 国文学研究室)

* * * (開催年月日, 目録の有無, 協力者又は協力機関名) * * *

<昭和53年6月現在 研究・教育情報センター協議会委員>

情報センター所長	高 鳥 正 夫	商 学 部 教 授	福 島 義 久
文 学 部 長	三 雲 夏 生	医 学 部 教 授	外 山 敏 夫
経 済 学 部 長	大 熊 一 郎	同 上	斎 藤 成 司
法 学 部 長	生 田 正 輝	工 学 部 教 授	宮 地 邦 夫
商 学 部 長	石 坂 巖	同 上	山 口 喬
医 学 部 長	浅 見 敬 三	文学部教授(大社)	宮 家 準
工 学 部 長	藤 田 広 一	日吉情報センター所長	山 崎 照 雄
社会学研究科委員長	佐 野 勝 男	医学情報センター所長	保 崎 秀 夫
文 学 部 教 授	森 岡 敬 一 郎	理工学情報センター所長	有 賀 一 郎
同 上	小 林 胖	三田情報センター副所長	石 川 博 道
経 済 学 部 教 授	中 村 勝 己	日吉情報センター副所長	柳 屋 良 博
同 上	古 田 精 司	医学情報センター副所長	大 沢 充
法 学 部 教 授	内 山 正 熊	理工学情報センター副所長	笠 野 滋
同 上	田 中 実	本部事務室長	安 西 郁 夫
商 学 部 教 授	岩 田 曉 一		

年次統計要覧 <昭和52年度>

慶應義塾大学研究・教育情報センター

I. 図書費 <52年度実績及び53年度予算>

支部センター	52年度実績 <単位：円>			53年度予算 <単位：千円>		
	図書支出	図書資料費	(計)	図書支出	図書資料費	(計)
三田情報センター	105,046,435	110,344,792	215,391,227	267,174	1,387	268,561
図書館	105,046,435	683,240	105,729,675	135,650	1,387	137,037
研究室*	—	109,661,552	109,661,552	131,524	—	131,524
(私大研究設備相当額)	(14,500,000)	—	**			
日吉情報センター	15,221,114	31,209,130	46,430,244	56,490	1,360	57,850
図書館	15,221,114	1,248,396	16,469,510	20,540	1,360	21,900
研究室*	—	29,960,734	29,960,734	35,950	—	35,950
(私大研究設備相当額)	(4,500,000)	—	**			
医学情報センター	47,231,308	1,403,741	48,635,049	54,545	1,619	56,164
"	43,391,573	1,403,741	44,795,314			
指定寄付金	3,839,735	—	3,839,735			
理工学情報センター	35,235,941	901,415	36,137,356	44,750	904	45,654
"	35,235,941	901,415	36,137,356			
(管理工学科寄託)	(180,730)	—	**			
(私大研究設備)	—	(1,300,000)	**			
合 計	202,734,798	143,859,078	346,593,876	422,959	5,270	428,229

注) * 特別図書費は含まず

** () 内は合計欄に加算せず

私大研究設備相当額は私大研究設備助成金に相当するよう義塾が臨時的に手当てしたもの

II-1 蔵書統計 <年間受入及び所蔵冊数>

支部センター	冊数	単行本			製本雑誌			合計	
		和	洋	計	和	洋	計		
年間受入冊数	三田情報センター	11,653	16,386	28,039	8,318	3,096	11,414	39,453	
	図書館	(6,622)	(5,858)	(12,480)	(2,826)	(1,397)	(4,223)	(16,703)	
	研究室	(5,031)	(10,528)	(15,559)	(5,492)	(1,699)	(7,191)	(22,750)	
	日吉情報センター	7,555	3,240	10,795	1,961	1,997	3,958	14,753	
	図書館	(5,538)	(152)	(5,690)	(1,640)	(7)	(1,647)	(7,337)	
	研究室	(2,017)	(3,088)	(5,105)	(321)	(1,990)	(2,311)	(7,416)	
	医学情報センター	836	643	1,479	893	1,974	2,817	4,296	
	理工学情報センター	1,426	306	1,732	2,853	5,017	7,870	9,602	
	合計	21,470	20,575	42,045	14,025	12,084	26,059	68,104	
	所蔵冊数(累計)	三田情報センター	409,304	329,145	738,449	96,900	72,566	169,466	907,915
		図書館	(314,256)	(201,511)	(515,767)	(54,920)	(36,078)	(90,998)	(606,765)
		研究室	(95,048)	(127,634)	(222,682)	(41,980)	(36,488)	(78,468)	(301,150)
日吉情報センター		118,602	63,813	182,415	12,248	16,951	29,199	211,614	
図書館		(80,210)	(6,453)	(86,663)	(7,796)	(124)	(7,920)	(94,583)	
研究室		(38,392)	(57,360)	(95,752)	(4,452)	(16,827)	(21,279)	(117,031)	
医学情報センター		15,807	18,779	34,586	32,219	60,804	93,023	127,609	
理工学情報センター		21,262	11,964	33,226	22,455	53,586	76,041	109,267	
合計		564,975	423,701	988,676	163,822	203,907	367,729	1,356,405	

注) 所蔵冊数(累計)は年間受入冊数から除籍冊数を引いた数値を前年度の累計所蔵冊数に加えたもの

Ⅱ-2 蔵書統計 <逐次刊行物：タイトル数>

支部センター	種別	カレント			ノンカレント			カレント・ ノンカレント 合計
		和	洋	計	和	洋	計	
三田情報センター 図書館 研究室		3,884	1,869	5,753	4,793	1,778	6,571	12,324
		(1,497)	(536)	(2,033)	(3,063)	(1,030)	(4,093)	(6,126)
		(2,387)	(1,333)	(3,720)	(1,730)	(748)	(2,478)	(6,198)
日吉情報センター 図書館 研究室		488	428	916	152	403	555	1,471
		(370)	(10)	(380)	(71)	(3)	(74)	(454)
		(118)	(418)	(536)	(81)	(400)	(481)	(1,017)
医学情報センター		929	1,066	1,995	559	958	1,517	3,512
理工学情報センター		945	1,037	1,982	1,196	1,711	2,907	4,889
合計		6,246	4,400	10,646	6,700	4,850	11,550	22,196

Ⅲ-1 利用統計 <貸出及び閲覧冊数>

支部センター	内訳	館外貸出			館内閲覧	前年度比 館外貸出(計)
		教職員	学生	(計)		
三田情報センター 図書館 研究室		9,942	53,955	63,897	68,710* 開架	1.04
		(6,334)	(51,021)	(57,355)		0.97
		(3,608)	(2,934)	(6,542)		1.03
日吉情報センター 図書館 研究室		3,008	32,078	35,086	13,024 開架	1.42
		(1,090)	(32,078)	(33,168)		1.47
		(1,918)	—	(1,918)		0.91
医学情報センター		—	—	29,653	全開架	1.03
理工学情報センター		—	—	13,767	全開架	1.21

* その他貴重書閲覧 956冊/117人

Ⅲ-2 利用統計 <相互貸借(複写依頼を含む)>

支部センター	内訳	依頼を受けた(貸)		依頼した(借)		合計
		国内	国外	国内	国外	
三田情報センター		437	1	136	110	684
日吉情報センター		61	0	31	2	94
医学情報センター		12,543	162	2,363	144	15,212
理工学情報センター		21,665	0	1,014	106	22,785
合計		34,706	163	3,544	362	38,775

Ⅲ-3 利用統計 <複写サービス>

内 訳	学 内		学 外		合 計		M F
	件 数	枚 数	件 数	枚 数	件 数	枚 数	
支部センター							
三田情報センター *	14,509	268,953	728	20,545	15,237	289,498	70 件
日吉情報センター** (P P C)	—	45,812	0	0	—	45,812	921 コマ
医学情報センター	50,410	417,675	33,736	218,719	84,146	636,394	6,072 コマ
理工学情報センター	20,793	344,299	21,665	210,657	42,458	554,956	0

* 他にリコピー 419件/63,597枚 及び P P C 461,436枚

** コイン式P P Cのため件数は不明, その他, リコピー 178件 (学内117件, 学外61件)/4,686枚

編集後記

◇この4月から、日吉情報センターの新しい所長に法学部の山崎照雄教授が就任いたしました。本誌巻頭の「新所長の抱負」を通して山崎新所長の新しい仕事に対する並々ならぬ意欲とパッションとを感得することができるようです。

この機会に日吉情報センターの発足以来3期6年間の永きにわたって新組織を育まれ、将来の発展の地歩を固められた三沢進前所長に対し深甚なる謝意を表したいと思えます。

日吉情報センターは発足の当初から難問が山積しております。特にパブリックサービスのある藤山記念図書館とテクニカルサービスの拠点である研究室書庫とが地理的に離れているのが致命的で、この欠陥によってスタッフの効率的な配置を妨げられ、意志の疎通が不完全なものとなされ、ムダな仕事の処理を余儀なくされるという事態となっています。こうした悪条件の中にあって、教養課程の学生の読書意欲に少しでも応えようとするパブリックサービス課のスタッフの、向上を求めるひたむきな努力は天野レポートによつて的確に記録されているといえましょう。

◇研究者とライブラリーとのかかわり合いというテーマは、このKULICが近年特に力を入れている分野ですが、本号では数学者の立場からの斎藤論文、西洋音楽史家の立場からの中野論文の2篇を得ることができました。図書館のサービスはとかく初歩的で最大公約数的なレベルにとどまり

がらですが、研究者のニーズはあくまでもスペシフィックであることをこれらの論文は改めて教えてくれるようです。研究サービスに従事するスタッフは、現実のギャップを埋める努力を怠ってはならず、そのためには旺盛な知的好奇心を保ち、弛まぬ自己研鑽に励まねばならないでしょう。

◇ライブラリー・コレクションの質と量とが充実してくると、このコレクションを死蔵させないための様々な工夫が必要となってきます。目録の整備、レファレンスサービスや閲覧サービスの拡充などはその一例ですが、これらがいわば受身的な対応であるのに対して、利用者の図書館の観念を変革し、利用者自らが知識に接近しうるノウハウを習得し得るよう、ライブラリーがその過程に積極的に参画するという動きは能動的な対応といえます。コレクションの質・量が次第に充実してきた義塾の情報センターにとって、この利用者教育の必要性は今後益々深まることが予想され、渋川論文「ライブラリー・インストラクション」はその意味で今後指針を与えるものと期待しています。

◇浅井論文は学生を対象に医学情報センターという特定の場所で、特定のテーマについて文献探索を行う方法を説いたものです。講義との関連で図書館を利用することが多い学生にとって、一般的なガイドよりはこの種の限定されたガイドの方が有効であることは論をまちません。KULICとしては今後もこのようなテーマに取り組んでみたいと考えています(中島)。

編集委員 * 情報センター本部 渋川雅俊 中島紘一 * 三田情報センター 鈴木富弥夫 * 日吉情報センター 関 洋 * 医学情報センター 並木和子 * 理工学情報センター 池田久子 *